源氏物語評釋

帚木

二

第二帖

帚木

評釋

奪 此巻々を帚木と号するゆへは源氏の君中川のあたりなる人方々よばひあるいておちまゝ
ゆくへしらずになりぬるなり遠なるゝ人をたゞ帚のうれなどゝ遠なるゝ人をたゞ帚のうれなどゝ
のゝしれるなどよあやまりくまどひぬるなどゝ帚をみかるゝ人をたゞ帚のうれなどゝ
るものゝさまなるもあるべきなるべきなりとて付る名なりこれ
坂上是則がその系やうなる歌よりおもひよりきたれるなるべし
ともかく帚木と義濃伝授あるゆへの説よ世系ふせやといふ所まある事なりとてこれば
帚をあてゝるやうなるべく近くてこれバそまふ仮名あるこれ
あらあらよくよく人作りなり

新 凡此物語の始終の趣ハ此巻々ハ桐壺巻々ハ系譜のごとく此巻巻
と序のべくふてその系譜ふつゞく巻巻の中れるふもすべてその名を負せべうべきなるべ
源氏の女を紫のあるべしの人始ハかのうつせみ巻々あれバ名とせべしやあるべし或説ふ此物
語伝授ならびにあるべし又若紫巻巻ハ巻々のうちとなるべ
あくなれ抱らとすれバあるものあるべ巻巻ハ巻々のうちとなるべ
て始終せうとのふハ抱の伝授ふかもちゝでみぞうふ故あるべ紀ユ夫をおもしあるて
ぞ伝る抱てそ抱伝の巻々巻々名ともいとかろ紀名ともいとかろ紀名ともいとかろ紀

事をもすべてとりてけるふかあるべしとぞ世のこぐらうぐらしさをいとで上一人のたまふ
けけり　なのこころぎ　事をこそあるどのこころわかもとてある人記者のさてまでぞ作るべき

[玉] 源氏君五十七年の夏のすえ紫野宮八中ねんの仏事をはじめ　中ねんの仏事　中ねんの仏事　中ねんの仏事
とのたまふ　さて法華ふは十巻を十八の巻とをしれるハ侍ふ　中ねんの仏事　中ねんの仏事　中ねんの仏事
巻ハ桐壺巻ふ十二といへるより後宮事紫巻ふ十九巻のの一品なるをあひだ　中ねんの仏事　中ねんの仏事
すべて巻をいへることあるまじ　紫巻をとをてるもこぐらの巻まなぶあてうも
逆ふうぐへて定めるのある法華ふの法華ふ一年の遺ひる巻ふ巻をハ十七巻之
その一年　ぬぐるよ　ハ　ふ　ぐ　れ　巻のところよいぐ
○巻巻端の侍ハ　ふ　ふ　ふ　ぐ　ぐ　ぐ

[illegible]

評 此考をよりの夕顔をまでハ一つ〻にの文ある故こゝ不分ましてこゝ[illegible]
いふるゝぞといふてハ今ゝ初るべきさまハあ〻ぞれどかいなでの事あ〻ハ[illegible]
[illegible]の傳をうけ次ふ此事ハ[illegible]の[illegible]をいひさて中川の限をひとつすべて[illegible]
べたことゝなるをさハあ〻ぞしてあ[illegible]ふ[illegible]
〻べちふ中陪[illegible]
つたくあ〻[illegible]
さまてこゝふやとゞ[illegible]
はゞどもをくまゝ論じあ〻[illegible]
ゞとにたゝめふて[illegible]

序あゞやうにかの〻てハ[illegible]
さはあ〻ゝバ[illegible]
はまバたのさはも[illegible]
なゞの[illegible]
とり出さ[illegible]
を[illegible]
[illegible]
ふとゝなの〻て[illegible]
とゞかゝるあゞ[illegible]
う〻むこと[illegible]
○[illegible]
実ふ此[illegible]
めゞ〻〻[illegible]
ちゝこゝみをたゝ[illegible]
とけ云のこゝ[illegible]
ゝとをいひつひ[illegible]厨子のふこゞもを引出ぐさらぶ[illegible]
小左馬[illegible]
すきゝなたにたゝ[illegible]
きゝ〻ゝ[illegible]
あるゞゞ〻〻[illegible]

○ちゝき本

たゝ〻る業業限ことゝて許ぞうんをつけくゝるべし此脉十二段ゝてつひゝゝ竟
ゝゝ小藤式紙一人をまづ下ゝせく省ゝまゝるゝゝ紙ゝ小ゝきゝくゝるゝゝぞゝゝこゝゝゝゝべし
さゝてゝゝゝゝ式紙空の大ゝゝれすぢハゝちゝゝゝゝ上中下の品ゝゝゝゝ

その源因とハ見るべきありさてまたこゝまでは一段二段三段とまたまたてつひに十八段よりさらに十八段の品定あどいふすべて一條のおもしろき所くゝかの段ぬけぢやうのやうにいとゝぬうへよりいふべくもあらずされバ今ハ又それをも省きつゝ但し一本のきゝ所よハ例の標をつけ彼此さるのまゝをかりてあ小示しつ

○平定と平忠夕顔の事とハいとくゝめてさるまでどさふハあらぬ馬陰がのたゝりしことゝ源氏君のかんつゝけてさるあやしたゝもあくがれのふさなふ書あしくるあるタ顔ふ所くゝふそのつるぎの剣を挟ミて平定の腹とかけさるまゝやうよりまゝたゝうさまバくゝけまゝどその平くゝて其脈あるとを許ゝあらハきゝ平忠よりタ顔君のすハ平定の附陰中ゝのかゝり生れる事ある事バ平定の次小まゝ見出べきことゝあるをさハあゝ〳〵次よりもゝ見ぬさまふタ顔をあゝハさまゝてる平づゝいさゝふめでゝ大よりそつゝ物ゝゝハおゝるよりかゝるおめ見でゝゝぐうどの月ふもまのさ陽れ見ちゝゝるゝハとあきたゝるまのあるをかくとかゝくゝ宮ひゝけぬさ陽ゝ物をるゝてゝて平定るのめゝゝさもいとゝいゝゝくハおゝやるまゝ見ゝ人さるさゝて作ゝぬ〳〵のよふぬけいでゝるかゝくゝさをあゝをひまゝゝゝる事ども打絶おもおゝ

○平忠とタ顔とハ同〳〵ゝの人あるを相背ゝく妻ゝる中ふ一人ハ勇さいとゝまやゝよふくゝて見ゝるゝゝちをもさるゝふゝゝ世中のあるさまをもふくゝひまゝてあのあゝまもゝゝゝきふんのみさをもゝゝあゝぬさ陽ゝゝゝ一人ハゝゝち

をゝくゝおゝどゝふおゝとけてさゝゝる事さもあくゝゝゝるあげふこあれゝるまあゝよかまゝてゝる反對の法ありさていゝゝも同一衣のゝあるゝ妻ゝ平忠といひタ顔といふもんあゝふ似ゝゝりさて又ゝまゝゝゝのゝ〳〵ハ物語れむゝとあるゝ〳〵ゝゝもあゝざるゝゝふ平忠ハ園へくゝゝりゝるゝよゝふて事をゝゝちきゝゝタ顔ハゝせくゝむゝゝゝを物とゝあゝゝさ陽ゝゝくゝまの物語れ伏案とせゝれゝゝゝさて平忠ハ園陰平ふ平忠をかまゝゝるハ源氏君の須磨よりゝかゝりゝひて〳〵をゝゝさゝゝとゝゝゝゝひゝゝふ事のつゝゝふ平ゝ未をとゝゝゝんゝゝるゝゝりタ顔ハゝゝゝゝゝて物ゝゝれまゝゝるゝゝゝ皆ゝくゝゝゝ脈をとゝゝ生ゝゝめゝゝゝゝゝゝて物ゝゝゝゝゝゝ

小や文の侍いとすぐくしくて大うさふいうくくる所ハきくれ〜こまも作りぬ〜の
さあくしくすのうハさおのづくし絵をうきく〜ゆどもこふくくよあやあくくるハ文ありてめ
でくくすぐくくし紀ハうハくくうてめでくくし

○端五

○野さくよ源氏君と紀伊守との問と三の所二所あるふいづまも問答のきふあるところよくく
ありてハこれれの神の中よさうひあくわくつぶけてかれるふそのくれいつとくきは
やうにうるまくるいひくらずめでくくすぐて侍國言の文ハ漢文とハ見ふてこの問答
のかさ作りてきふあるを所持さくふ書とうふてくして事情をてこうふことなきもの
あるをかくあぐやうふかまくるハいくくぬけ出る文うたなりくくり作りやうれ
所くハ次の巻くくふもいと多くくんをつけてえあくふべし

ひくる源氏名のこうびくくう

玉此下まで歌をそえて心得べし

釈この女房の母桐壺帝の御の御妻の母ハこまくどの
のめでまたてつけ申るとなるよう
けくいくまあり釈この伝のごと
く桐壺帝より後きる女の脉く
うびくくうハ考るとうあの半く
くきうく

いひくくれのふとぶ玉補此とがを
帥の妻ふれこぶと解まるハいぶ
好色のふれとぶあるべくかの須ふか
流されるふ時のせれ風流もぬるこ
の色のくくまハうくぶうやうの歌ひ
なうあぬるのくふるぶとくくハ
下のいとぐとうふ時はえうくく玉
ひくるといあるくれといくるものづ
くくれ文のかれひあう
いとぐかるすぐるぐもをうく
玉かるすきぐとくあるうるをや
あぐさんとくまでハこの時ハ源氏
君のこぶくくおぐせるんをいるく
釈すきぐとくいて即ぬるのす
あくいひくれるあ名ぬくうく人ふ
又くるぬるすをくまうとは世

光る源氏名のこうびくくう（バカリ）（源氏ム）（ギャウサンデ）（アシクイヒケサレ）
とぶ物語（シ）なるたぐとくかるすぐとぐをす（ヒトシホ）（好色事）（末）
名の世ふも学メつくて（傳）かるくくへぐとくくくうつ（カルグ〜シキ）（カク）（ゴト）（語）
とぐのび給ひくるかくくへぐとくくくうつ（全ホシ五カクシ）（ニデ）
きくくくんのあのひ作ぐなくよくるはいぐ（傳）（クチヤカニシサ）（然）（スワト）
いくくせをちぐうやあぐちるひくるぐふ。（世間）（ヒドウ）（悼）（ジウテイメキ）
なくびくるをくくくこふくてかくのかる（シナヤカ）（ワウリウナ）（ワハクシタ）（交野）
まはくくくられ給ひきんう（笑）
ふのくくのひくくぬうちにのみさぶくひよう（ジブン）（内裡）（バカリ）（侍）（能）
くくくひくくぬおいくのよきくくぐくまうでくふ（大）（殿）（絶）（々）（退出）
をぬのぶれみぐれやとくくぐひゆめるくくくもあり（合アフ）（疑）（葵上方ノ女房ナドナルベシ）

○たてきぬ

まぐもの世伝へてうぐいすの
をゝ流さんとうぐいすの
うて深くひらせる隠事をさ信
ア伝へる世のくれたのいひさ
ゲあさめのごとうさてさたの
かくるくるハられう次のそくよ
きるーおそゆるぐるをさるく
さるハいとくくよるをまぐうくく
釈 さるハとゆ辞とくるハさくう
吳ぬてされどさハくおぐいうさをを
くなや
おとひんをくるくるあて
玉補 そハきくふある字をおくめいくと図とぬて深氏君のはうく
ぐきのはくあるをくうくぬよくをトまてくくうくく
かくのくるる 花 はか納言の松ゆゆふ拙僧のあぐも出る必ずくおぐ拙僧かくのかるしまり 釈 この拙僧今
ハ毎ゆ伝ゆーぐおりゆあぐうれくさるゆるゆ色なるべし宗祇云作うお拙僧のくうて伝う拙僧のくふ勢すくるゆ面白く
ゆくくありくとくうさくゆなり
まぐ中おのぐくよ 玉 上の御覧のすぐれ清をうけくを拙つくくうのぐをれるくくうぐおるあり
まぐとりゆもを拙へまくうていあをゆりあぐくゆもちぐめくくをひくくゆる視くく
さあくくひくうくのひく 釈 このはぐひハ体云あり仮使とあるおぐくんぐとし俗云ゆいぐ林中の中書を
よくくくのひてくいるあり
おくいくくのまハ 細 相盃ゆも内ぞみのくくれまくくおぐくのゆおくのゆ白ゆくゆあひゆて打ゆ後ゆハ二三百ゆ
どくくくぐくまうぐのゆくくあり 釈 この清れぐくくきくくくぐの中れ脈をうけてつぐまくる所あり
きのおれくぐれゆ 湖 奥入 なくゆのくくおくくくれゆのくくゆ後きのおれくぐれくぎくくくゆ内裏ゆて
いくあくぐれんもあくくんと奏上くくゆハゆひくうぐ

うどゆ サウモ
ゆぐくくあれ拙ゆ拙ゆまくる。うくゆゆれ ツハキラシク 日 剛 ソツジナ
ゆくくくくさなぐくぐのまくくくぬ拙ゆ上ゆ 好 オウヘレツキ
てゆまくてハあれぐくくにひくくぐくくくくある 色 メツタムシヤウ 違 シンキナ
ゆくくゆんよおぐくくぐむくくせなんおゆゆく 今分カリおども図 留 癖
ゆくくゆゆくくくくゆぐまくくくく

なごりなくなれまるたるつ内裡ぬいみさーつぐ
きていとぐあぐるさぶーひ行ぶをとぶ大殿おいいとのまし
長居侍
おぐぶつるれ（ナドホニ）くうーめーとるぐーれどよろぐ
のたよそひなふくまとめづーしたほゆ。
装飾（ナニヤカヤ）珍
調
てーぐーじで行ひつぶむすこの子息あぐぶちぐーで源氏
のたとれぬ所の文ぐーくを御ホウコウつとんのふ二ゑぐろ腹
ゴバンショ
の中おたぶ。ゆよまるーくなれなーうひておそび遊
頭中将トシルス人ヒ
出ぐーふれをとぶ他ノ人ようハんやとくぶれしく
戯
ぬーるひーぶ。たのおとぐれいるぐーうづさ大セツニシ
大殿
行ふすーぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。
住
ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。
聞
頭中将
大弐サウニ
好色
ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。ぐーぐーぶ。
ウハキ
左大臣殿ノ方
頭中将ノ住ヲル処

やくむろうあるをいふ
がくりんをもあをびをも 釈がく
かん八漢文章を浮びのやとあそ
びハ差後を習ひのふやもく
まつられ 釈ふのあはまつりて
ふようせて人のむつまーくえをられ
ぬをいつーら語ありー
うーこまうもおりぐ。 細へぐーく
あくむつびうあふあぐーう札儀
をふもまそ付ひうふとえ見別京
生のあ法あどあとげーうこうの始
ふうげーあるぐー
つまぐーとふうーーーてうー
解上さもあーれあうあ法ばとうき
出ぐう脉を見びーうふあーうーて
あとげえのあ法をうあやくふせん
ぐーさとせーれうさてあぐーし
あうとあぐー 新式ふも教もすぐ
らい後あうまとり小之御殿油
とあうさうありあるあぐーれのあ反
なあれバあわりあぐーとふ
いうーくの紙あーふみ 釈艶まハ
うきもの芦やうふかるをあろ
いうの紙あーとうーあり
さりぬべき 潮中おあんせても

つーひまぐ。ゆーてぐんのいでいうーしあうた。
カザリ 光ルホドニ 源氏
うちつまぐ。ゆーえうひーつぐ。ゆーるぐ。かくあんをと
連 夜 昼 学 文
あうびをもぐ。ゆーイーツヨ。ゆーてをさくーうちあれ
習 巣 アンニヨリ 後
ぐぐいづくーてもまんれうきくーえあうぐーう。
ツキモツレ
ねのづくーかーーーもゆーぐ。ゆのうちよゆもふ
自 然 長
ことをもーうーてあ（ぐーるんむつまぐ。ゆーるーー
隠 ト云ぐ 睦
作まぐ。ゆーくーとふあくーーてぐんゆやうあるよひの
クイクツサウニ 降 暮 シツポリ 夜
あう。ゆ。ゆよ。ゆもをさ（ぐーくあう。ゆとのあ和
オホカタ 少 潮ハ
もぐ。ゆまいよりハのどやらあるこちするに。ゆあと
ユルリトシタ 殿
なぐ。ゆ。ゆちくーくぐ。ゆみどもなどんをふついぐ。ゆ。
ツネ 焼けたく 油 近 書籍
ちうくーぐ。ゆみづーあるいうーのうくあるぬみどもを
御厨子 紙 艶書

ひさいで。中ねもうあくゆうがれば。ざりぬべし。
すこうそんせんがうそなるべきもこそ。ゆし
給ひねば。(中ねの汁)うれうちとまてゝ
ぬぼさまこんてゆうそれ。(見ヘホシ)ナミくあべるお(タイ)
くこのぱかぶ(テイゴロ)ある。ほどほどくよけて。(分限相応ニ)(安ト)
かぞつくも(交)ん待うなん。おのづくうめ
くもあり。(メニクツレくニ)まちぐほあくん。(待)夕ぐれなどめ(今ミ)
こてぷんぜこころあくめとなんずれば。やんぞと(然)
なくぜちよかつふべさおどぱかやうに(カリニ立ラミモラミ)(ヨンドコロ)
(ナリ)(切)(タイセツニ)(秘)
ぬいざうなるづしおどにうちおたちし(ホザリ)(御厨子)(置)(散)
給ふべくもひくぷくそうおたまつべあれば。

あれハこのまちれむやそれあるべしかさち
ぜくんこに。(ノキリメ)(中ねの汁)かくざほくなるものどとてを(カラ)(イロく)(ムネ多)
れとてこころあてに。そまこうかまこうおどこうふ(オシハカリ)(某甲)(某こ)(問)
ホよいひあつもひまめてもれまこそる半(的)(カケハナレ)
をもいひをくうぐふもをうとおぼ(疑)
をどこてとずくれ。ゆでこうくすぎこうつうつこう(ヘタカト)(寡)(言)(トヤカクヤ)
かくを給ひつ。(泳汁)ことこておりくつどくふめ。(其所)(多)(集)
ゆこくんぞやさてあんこのだくもむよくひ
らくべさこのくまくべ。(中ねの汁)(厨子)(開)
こてうくを待くあめなどゆえ。かついでは。(甲は)女の。
あまこ。(此)もこなんたくよどれたかくくを(難)(難)(著)

次の語ようあはれがくうく。(釈)
些法いこまてうきくバ上のもむ
てくあくもかさちくつうくあかる
語こうえきこゆや止事をねぬさ
ありこれを後のそきこうこの語
とうてハけちふとうよつまあく
ゆうべ
それあれうぐと
(釈)年人の秋うあのくれあくうと
ぬ中れのとふ年とうのさし
そこふこて　(王)そこハ其所ソコモトヤ
て今の世ものくよりひそ
とうふよ同じ
ゆくこうつうでに　(釈)このあ
そうこに下あう。こうあきこうけ
しこもこうつけあれどうふ
へ係る乙甲乙の点つけさをよく
こうこえてよこ味あべ
女のこれハしもと　(釈)こも助辞
あさこれハこうあて語のつけ
きあよ記女ハ世ふあうく
とうあきこうふハ語こうこう
(王)こてこうふこの始こもあさ
めこのふ名目もこやく語法のこち
ゆ新こてふこうこう

あるるれと（次第ニ〳〵ニ）やう〳〵あんれすまへちる。きとぐうとべ（表方）
ぢうのなちけよ。てそうとぐ（手走書）をうふれ
いへふえうてうちしおどぢうハずのぶんよ（随分為）
よわ〳〵（サウオウナ）ぢも地ほうりとみのうまどて（多有其）もま
ことたそのうて（実其方）ぢうりでんえ〳〵びようふ（撰必）ぼ
めるまぢ（漏）ぢハいとうる〳〵やまどころうろる（難）
まぢうをい（貶）おのぐじ〳〵ぐをやりて。人をバ（心ヤリニ自賛又意）
地〳〵めかう〳〵いろとおやうり。地やなど（親セウシセンバンナ）
くもちとひてあぐやんて。おひさぢもれる宮（扶宅前のごとく崇）
のうちなるわどハ。まちぐかうど（詞）ぢきう〳〵ぢうく（ジブン）
てぢ〳〵ぢをうごうぢ。まもあわう。うちをう（動）（容貞）

しく〳〵うちおどぢ。わうやうわくまぢうこと。
わどぢのあ（ナンデモナイ）ぢすびをもの。人まはよんをいて（アドナリ若湖琴言葉セイハダス）
まもあるまよ。地のづうひうちあづけておる（自然）
ことヒけうみ（今）ん人おれるうをバいひう。（後方言隠）
ぢてあうぬ（サウオウニスル）ぢうをバをうひくまねびい（トリカザリテ）
ぶすぢ（出）。まちあ〳〵ぢとそうよいぢハし（其サウアルマイ空ドウシテ）
ちうちひうぢさんまことうとんあてゆうふ。（閑実ニサウカト）
ん地うう（劣）をぬゆうハなう〳〵んあ〳〵ぎ。『四ハ』ぢうめ
ぢうるうぢ（申将）ぢ。ぢづう〳〵ぎあまぢ。ぢ〳〵ふべてハ
あ〳〵ねどぢ（源氏）れもおがう〳〵ぢうをる（合）ぢやあ〳〵む。
うちぢう〳〵ぢ（合）ぢ。ぢうをうぢ（源氏）ぢうぢんなぢ人ハあう（笑）（片材）

おひさぢもまる宮のうちふる
河長恨哥揚家有女初長成養在深窓人未識 玉 おひさぢ
そのまるしハ年ちうてひさき
のうく〳〵ぢをのまうぢをハ人をと
もわるといかも用ぢさてうのまう
とうひて宮の内とづけの女ぢの
づ〳〵の文ぢおわひく さて宮ぢ
内といハ世ぢ宮の侍ふうて人の
女の親ぢるふまるぢをいう用く
宮ふ宮の内ぢするよ ぢハ〳〵ぢ
〳〵ぢかうど紙 釈 かどハオのさ
ふうふさとハ才養ふのうまち〳〵し
うちをう〳〵ぢおわどぢ
釈 ちう〳〵ハかうちのよぢをいよ
おわ〳〵ぢハたや〳〵ふるさまて俗云
ふおわとといふ〳〵ちのつあさ
まとというちう
まぎう〳〵うふぢと 湖 釈のも
とぢ。ぢの天ぢもあ〳〵ぬ〳〵ぢく
人まうふふをいう 釈 人のする
をうをまうふをとうをいれくふ
ともあふんともあくおぢう〳〵
一義をふ〳〵ひとうさあう
ぢ。ぢづけて 玉 ぢうふまれ一義ふ

をバ大てのまちづる
まるびいぐすん　王まべてまめぶ
とハこめるそ海のまりをうるをふ
くさん　王腐さんしてさえぶあそ
みもとう　釈ひんそめくろけうう
やうくくは茅るをひんもうとを
うめぬくるくきまぐるげあれ
釈甲乙の点つけくる禅師をつぎ
てらはべくうめぬくるとハんの不
平を歎息くくるさまのあうくぐろ
しげハ諸法ハ中和の和くひまくる
さまふぐろまくるを解海よ俗ど
めをちくあげてまおの仲れ海氏
ちくよぐうくんひるさうくんや
ふめべうくんうめきくろくくき
とあるハ和くるまとハくく矣れぐ
いくあべてハあくねどくく
湖まおの為信をくらぐくなぐし
ハのくまるふハあくはぐどく
ありあくくて　王あくく海氏貧矣
あくくとくくくくくく
そのくくかどもあるきくハ
王上よくでかくくどもぶつくくへて
といひぶくくあぐけてあどりくくハ
かくくどある女あるをそ身バくくの

んやとのくくぐいどさぐくあくんあくくよ誰
くはすくくれよくくくくくくくくくくくくくを
くくくくくくくくくくくくくく

さゐを妻〳〵あ〳〵〳〵とうハつまゞゝあるあ和ふ和とけてうゝ〳〵ひすふ情ふをう〳〵おそゞがゝめふ一段ゞ
との切ゝ〳〵ふそのそゝきを撫ゝ入まそゝるゐ氏ゝ藤のいゝめゞゝ氏年つゝゐり此脇を先よゝゝきまゝ動て
よゐゐゝ〳〵ゝゝ又年俵ハ出小樽ふもいゝれゝゝゞゝゝ上中下ゝゝの和をいゝ和ゝ上が上ゝ下ゞ下ゝとハゝぶきゝく
もゝゝゝゝ中の和ゝゝをいゝゝんゝゝゝゝ

やすらふをすてゝ
国公ゝおはしまされハうづまさたし
ゑひうけぬさいそふ
釈かゝこれをあさうふをづたを
をてゆふらうをる彩ひをいふ
すゞくおぎうゝしたよ
国をぎこゝハ上のあれるをも
今せくいろう 釈さゝばをゞく
冨ゝうふ悪く女の思ハなをうあ
べゝしのさゝ思ゞハゝしさゝハ思の
振りゝ冨ゝるをいふ
こゝ人のいゝんやうよゝ
国今ゝるあのいゝふさゝふまきゝ
ゝしたをゝゝとゝふハあゞゝるあ
をさゞをたゞゝて位ゝるとゆ
ねの源氏ゞよいゝく源氏ゞよく
ゝゝをたをふゞをゝるゆ
もこぬゝこ人のいゝんやゝふゝし
めゝのゝこゝゝあ人のいゝんやゝふ
といふ限ハひゞゝゝ
釈このまゝしまゞゝゝゝり
くハ源氏ゞゆゞゝゝ冨栄ゝひ
ゝゞゝさもあゝぬゝと人のいゝんや
うゝとゝふさゆもあんゝれ考ふ
ゞゝさてゆゝむゝりハ侍ゝまゝて

来 ようけるゞたすぢゝあゝぬハよのくれゝつゝと
サヤウテルベキ 系
をゞさはいゝどゝあほゝこゝたゝう。又ゆゝとハやゝんゞを
サウハイフデモ ヤハリ 別 カクベツ
なゝたゝさゞぢゝあまゝゞどゝせゝよゝふゝるゝあつゝたゝすゝゝれゝく。
ナル 縄 テガハリ
ゆゝせゝうゝたゝゝりゝくゞゝはゞゝぼゝえゝゆゝゝろゝへゝぬゝまゝバゞゝたゝ
移 無 衰
んゝとゝゝてゝゝこゝゝ事ゝゝゝ

上が上ハ世のさ作りぬ

釈 上方上のすハ[illegible]ぶべき

[illegible]

玉 一件ものがたりの[illegible]

[illegible]

釈 [illegible]

[illegible]

釈 [illegible]

[illegible]

釈 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あもいそぐ　釈父の年おいそぐしと云
ようの伴をもとめ給のうるさひあて
ようあるあんもそれ〳〵ぐ戒まそ
なるくいとくそう。上文りと
の思附なのおり事あひとふとうう
まそはりくハ附中れの羽をくホの
くもあうやとつくるさこふて父が云
ようすとはさされぐくされもも文ま
ゲるおうぐさりどおーねバきくと
いてくハ中れともはずおちづく況
わ作ひてう父の俗とれれ者ふべし
いでやさくらくげるのようをと
平　海のなと葵上のすをもひあり
ずかく　玉下のをのをハ世ある物をの
ちあり　釈をりの下に傍注のご
とくをはをうてを受さるし
ゆさはとどめのうく
釈これようう海氏をの事ひうひて
ままもくもてくたくちとをの俗
脉あくをひりと管をうさく
ようふれまをを今俗ようある
ようをとくしわげハ父新ふ白の
とあるをを体云あう
あくまづく　釈鮑足まづこと

おもひくの居ふまやこやこうらん物を
いちづく。いでやかくのちあとそあるとぐふうげ
なるよ俗とまんそおづすづ。ちうさ古そど
世ヒモラ世ヤウ処テカデ　尼べき　心　得　イヤモウ　上　品　サヘ　難　源体　衣
のあるくうなうふなりだうをぢどげ
ヤハラカ　直　衣　ジダラ
明くきるー活ひくひあどをうちすて。
ニ　著　紐　結ビ玉ハヌナリ
うひふ。ひくるぢふいとぐめで出とく。
傍　即　火　影　ヒトレホ
女ゆくと足なくるぢふいとぐめで出とく。
ニナリテ
かみをうちいぐてもあむあくまづハうを
上　撰　出　飽
ようふ三さぬぐのをうどのをかうあそせ
作。おりくるれよふつけてうるハとぐあにも。
ウ　行　大体世上ノートンテ一トホリニ見テハーイフ意ク　外　合　談
とぐ物とうちきのむべきを作ぐくんふ。
我　憑　奪　撰　多

人ぐのようにつけてうるハ
玉　以此ものの人ぐうとうてま
ぐふさうのく　釈苦ハ難のこと
ものこのもゆけよつくうまつ
釈　上とうう男子のおつくのをと
ちくなくくををあう
ようぐをとあるべきも　釈ようの
ぐとぐくハ改革をとうて保ちき
いをゆの桂石のくをいふまこのう
ゆりのとハをの大器とうそくを
指ス改革ゆくとうぐをてくを浪ハ
ぐうう
うぐうくをもう　釈いぐう
聖ぐうハうくもくぐ一二人うて天
下のくのの執行ハ人きあーねで
さあくのつう人あうて上ハ下助
ぐれ下ハ上ふあひき保ひそ奈
ゆづのあひく政をすあんくも
らんの辞あぐうひあう　抱　天下
ハひうくーとぐを法人力を合そ
作ぐハ中ーまを化ぐぢきあの
中のすハあう一人のをうくふ
まバゆづうくあのてをのある
ぐうこのあうーハうとあるをを
いべー　玉　聖徳太子憲法文上

うるあ中ゆもぐうんぐひちぐむゆーうる。
男子　得　決
ものをれ物ゆ中に出ぐうまつ。ぐうぐく
トシタ　世　官　シツカリ
りをよのうぐんとあるづをもまとのう
つるゆとあるべきををうぐさんよハかぬ
器　量　固　真　出　難
うるべーかーさまでかーとてもひう
賢　人
ふうふ中をもつぐちちるべきあね
人　ニ　政　事　シ　知
バよてをるすけーまーハとふあびきそ。
助　難
事　廣　足　女　主　譲　合　撰　政　知　難　足
あーとまべきくひとうぐ。ぐひめーすに。
中　緊要ノ事ヲ云フ　王
ぐうでなーうるべき大事どもあんうぐく
おほうをーとあまびうーつあさきるさふ
カレニ

行べ下驟ろ〜

とあるまこばうう ろ〜

同をへゆとそい子すんばろうゆ〜

もればあおりいまゆ〜ゆあおさき

るさに古今集俳諧 釈 とすればと

とあるこばとろ〜くりまてろ〜ばの自然の

差ふとれろゆめ〜ゆ〜ゆろの教ふいい人

べ〜あそきるさ〜ハ雅言ゆあふ左

又俗まバ右ふ〜ゆとゆそとい ろ

一つとゆるゆるあまこバ人一つとろきてす

もまこいふさ〜人まであり

あゆわよふもまあべき人の

釈 あゆあ〜ハ新字をさあてゆ〜ゆ

ろ〜俗ふゆ〜ゆ〜ゆとのつるよう

あ〜ふうきそ〜ふゆべきハまま〜

出て拙者そ〜て出ゆろ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

ゆ〜くゆ〜ゆ 玉 ゆ〜ゆ〜ゆ〜ハ〜ゆ

ハろ〜ゆ〜ゆあゆ〜ゆ〜ゆ 釈 此

視のゆ〜ゆ〜申も西下の点つけるを

よく申ひて訂補を送るべ〜ゆ

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆのゆ〜ゆ〜ゆ

釈 ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

ゆ〜ゆの女ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

の拙ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ妻

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

てなの拙ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ人のすゆ〜ゆ〜ゆ 寡

を釈ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ公のすゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ人のあり

さはゆ〜ゆあゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

ひとゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

おゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

されどあるよ　玉されどゝハんおてゝ〻そうろうとゝくるあるあるうてゝいとりあるうハ行るくるんゆゝてゝ〻そうろうと
ハいくゞもさゆゝのゝくゞひもゆうハゆゝゝかゝんのゝくゝ
よゆゝきゆゝをゝんゝへあつゆゝるゝゝふ　釈されもゝをゝのあるゝゆゝをゝれこれゝ第るゝゆゝきゞゞひゝくゝし
ゝくゝおゝゞゞゞ　玉ゆゝびゝゆゝれゆゝゝゝにゝゝそゝゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝ

牛女のようがのすれ中ふはふあのわあくいえあるまゝ[illegible]一のもざふるをいろうさぐものをすてハすがすま
とゝの向すしぶようまあべ
あのあられをうすゝ　釈あのあられを初ハいくらたすあんもあるうふをるゝ〜るハ之おるるくるも
ちろたのくもぐゝとゝくゝをつゝべゝさるるきつのでのおさけとゝ波月ふ波波ふ月ちるぐのもろう上
おるゝゝぶどするゝくといゝるぐゝ〜あるのトふでぶゝををくく次の頃へけくゝたべゝ
をゝゝきゝすゝあるゝゝ　王ふ流のるゝふ妻のゝゝるゝの方ふいるゝてもよるべきぶゝくゝすゝでもとゝあの
あゝれちうまゝゝとハあのあられゝまるるゝ〜のふるまひもるをいふ釈もゝあるゝとゝ向ゝをるゝべゝ
まゝまゝくゝたをぶをゝて　王又とゝふ向ゝにゝふハくちをゝゝるゝぶゝんとゝくゝへうけてんべゝ流
ある方ハあくてもよるべゝとゝてゝられども又さゝくゝ　釈まゝあくゝあゝぶのきゝてをのゝゝをゝいゝぐゝくゝ釈まゝあくゝ
ゝたをぶゝとハ夫の後たゝてゝるゝ向ゝ妻のゝゝゝまゝめゝたゝゝふ歌髮ゝて左ふふ耳ゝより歩ゝも出るゝてゝゝふゝをか
みゝをゝゝゝぶゝちふ　王古の女ゝゝゝる髮をゝられゝるゝふ歌髮ゝて左ふふ耳ゝより歩ゝも出るゝてゝゝふゝをか
ゝゝちゝてゝゝるゝぬ女ゝを耳ゝより歩ゝへうゝるゝ髮をゝられゝるゝふ歌髮ゝて左ふふ耳ゝより歩ゝも出るゝてゝゝふゝをか
びゝゝゝゝふたゝゝとゝゝで　橘亜美相主人母　釈ゝゝゝゝ

つげくさひとり公夫ひも数きも
せくくあり れハ歎息のこゝろ
あるべきなどあるつゝに
国夫のそれさまを妻のこそれ
ハ行るゝなどいひてく 釈あるゝ
ハ強くく数あ〜ぬさくあるとハ
あるゝあるこゝにあるべあると同じ旧
説ハひがごとく假字もこゝとかべ
さ〜あるなかさくんハ 国うち仰
のき居るゝあるとつゝあるさまを云
あり 釈そのゝとんもつゝべて
ゝを仰ぎそうゝとくる件べ
いぐハくちをしくくぬ
国くちをしくなるをつくゝる
詞ありてくゝがゝまゝゝくゝとゝあるゝ
こゝまで一つゝきゝあり
評かくのごとく女せゝいとなきあ
あり俗ゝゝちくくなるてゝいゝ話
の女ありさくゝこの女のきゝをかん
くるさもあるべきゝあるをそれを
そひさくん男のんをかれるゝ
きくんのゝまゝハくんさくんがごく
ゝそいとゝ〜妻〜くあゝれゝまで
よめでくく
くぐひくあるゝこゝあるそ

細男のお入へ

出入よけてもゝおゝやゝ朝 延 私 交
乃ゝ生くずゝまひよゝたあゝたゝ事 タラク
ゝあをとゝゝあるゝゝ留 疎
うちまゝぜんやハぱちくくゝんん人のゝ近 我妻く
ゝゝひくるべくらくんゝかゝゝ談 合
ゝゝくくハくくく

あつて功者なるべしいにの程しるも
あるべきにとなり
なるのりげもにとがや 玉 うさもれ
あの時はどもとはをんなりとあるハ
さる女ハれこゝのりさにとゞハ外ふ
て猛といのくしくしゝ。あれこゝるハ
きやハこゝるハよるれどそれもあハ
ふてやとうまゞのさて
そバくくしくんづさあさんの
玉 そバくくしくハみ何よるもく
しくあさしうねしとゝるよるし
うしさてこハ男のんこゝバくしくん
づにあくゝあふて女の方ようゝバく
しきれあしハ
いでゞこえ 玉 ゝふふきてえもく
しくさるゝゞのあるゝあり
くあるふこ扱ひも 玉 岩田の女のさ
まぶねのやうをとのるゝあふくよく知て
いよるゝ知あるゝでもこゝさゞあるゝてハ
上件よゝるゝまくの女をすべてゝゞ
まをよゝしもゝ空やうあるゝ
いくゝるゝあげく 釈 しふゝふたゝ
ひるる女のゝゞるゝにを殺見しるゝ
今ハゞゞあるもよゝゞるゝ
新 かくあるさまるさあるのゝれバ

うゝむ。ちゝ平生ハすゝゝゝくゝくんづにゝ
なにゝ人の。をゝりふゝよちきてゝいゞゞるゝを
るやゝもあゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝ

ぬゝ紀ぬ半かゝ。と鏡をさへなんおとゝ作落
今なるふよ。いとかるゞゝくこゝさゝびる
こゝろ。ゝんざゝふゝらんをとこ淡おさく。
みるめれまへよゝつゝ紀ことこのうとゝれゝ人のゝを
ゝゝゝゝぬやうにゝゝかゝまてゝ人をまゝどし。
ゝんをもらんとすゝゝゝどゝよなゝ紀せのゝゝとひよ
なゝゝ。いとあゝ紀ゝおゝこゝゝ形ゝんふゝゝやゝゝ
ほめゝゝてゝゝゝゝ。ゝゝゝまゝこゝぬれゝゝゝゝ
てゝゝほゝよなゝゝぬゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
んゝゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

評こひがみをうたさぶらて
国おとこ殿をそださてそうまるよ
と後悔をさらさ申し
うちひをうぬ〜 新色ハ泣てまの
口つきをいふ〜 釈むーしよ〜嘆
字をよわ〜ことて俗ふびり口をく
とうまあれう
評人ぎふかづ〜ひてあれちうかも
もる女のんぐろこの後悔をさ海ろう
ぐと〜此類今世ふもをりく〜あり
ふごろふもあ〜ぐとよりもう〜
開俗ふて濁世ふあり上時よりかく
出ふのくちん尼ふまうろびあるハ
うんておたぶてよ公きすのこと
釈ううぐんとそ尼ふあうるもの
悔〜きんありうるもも〜あるふ
なまううひよらてこあ尼ろ
いそあう死絶のすく。
くぬすぐせあさうでそ〜
釈ようせハ例の宿因縁に絶ぎた
ち固あうて尼ふあぬうちふうる
出てうろかて〜しうんあもも
やぐてうみをひ出そ〜
釈ぎていうう〜あ尼へかうさて
とみをひ出ハ小指ふ尼ふをむきそ

あ〜尼ろ趣ちふも半ぐよひぬ尼ぐぐそだぐ
漂蕩
ゆ〜ぐ今ろ上文ぬぎぐを宿世ぐ〜でぐあ尼ふもな
さで〜ぐねとりたうんも〜やぐてそのおあひ
出〜うあ〜きぬ〜ぐ〜ぐ〜んやぐ〜く
とよく〜とたのひろひく〜とあ〜んをうも。
相副
か〜らんきぐみをとぬんすぐ〜〜ろんゆ
刻
うてぐちだりふうくあ〜ぬんぐれもんも
宿 餘
うぐ〜あ〜ぐ〜いれうもぐ〜やハ。又なのあふ
ハシウ キガオカレ イモノカ ヨコミチ
念
うつろあ〜ふたうんんをう〜みてぐ尼ぐ
キモチヲミセ
背
ぬんメ〜ぐをこがぬ〜かふ多ん〜ふう門
モノタ アホウラシ
ぐ〜ひとぐ〜ろんぐみてあ〜ぐ〜ろぐ〜
ヒハジメタ

いとぐ〜ぐ〜ぐ〜

舟のうたふる時あしとぞふあやなし。
男心ノ定ニラヌタトヘ
さんちゃぬるといへだ中ねるうぶぞく
サウハゴザラヌカ　ナルホド　ワケガナイ　点　頭　中略同　余本ソノ通
あるうくぞうともあまてもぐいるむ
人の世ハ　テ　ニナラス
大事ある　男心
てんすぐさぶさ　合多三年ノ題
ざ・うんとおぼうられどぞれさもおら。
直　ソレモサウハアルマイ
とをかくうもあがふぶきふ・あんをのど
違　ユル
やうふみもの　見テ　コラヘル　外
まぐうりまぞいとひくぞいあうとの
我　妹　葵上
まんぱぞのはちざあふかあひあんうとおりく。
とも云々ヨリ下ノ事ヲ云

白氏文集の偶吟詩は無情水任方圓器不繫舟隨去住風とうるをとりてもろうさてぐふあるしハはかりよりかくていうう

さ侍ぬるといへば中ねるうあぐく

評　當夜のさはをあつりてる第四の段あうざてすぐくうりの男ふれを忘ものというりうこてまで八女の男ふれを忘ものををうり上ふいとくうをくねぢけがまりにおりえをあるバうくくとりへ八男の用をおふ對てよりくまぐ・先男のようぐんをまぐさよりぬいひくぬよ女のあくしらひざあをいうり女の法つりで乱まぐバ・ていひ・ひびめぐ・ぬ中ねのあくらひの法とてをの色けあた女をいまもむるうりさ・あるうりくく

釈　附ふあぐうてあるふをうくくもあれともありん人のあぐるんあ・ん八大事あるぐしとくくのりげあるくぐひと小接ホ女のいぐおりてホへをるるやうのるぐうりさるあるをふといれるるぐぐ・・大事八俗いるふ但しく大ぞるるくくあう

源氏　君のうち移りくことばまぜ語交ねをさぐ眠モノサビ
しくくやもドカシとろふ馬のくくあのさぐあれ博士　批判
なりてぞまうぞ・ひぐらだあくう。中將ちこの
おとともうぬ竟アシラヒてんどをよいれてあへ・らひ
理　比　万　ようぐのことたよりてへておぐせ。本
あ給へり　作　出　臨時　物
のうちれ寺とくみれよりづの色をんよまりぜて
たくういぐすも。ぞんぐれりてあそびとの。
そのあとたくもちぐまくぬぞぞぐれぐ
うるもぐふかくもちぐもちぐべうるぞと時よ
つけたくさほくぞくぞあるくきにめうつり
てぞくをあり大事とくくぞとに
オモシロキ　タウセイフウ　移　目

白氏文集の偶吟詩は無情水任方圓器不繫舟隨去住風とうるをとりてもろうさてぐふあるしハはかりよりかくていうう

さ侍ぬるといへば中ねるうあぐく

評　當夜のさはをあつりてる第四の段あうざてすぐくうりの男ふれを忘ものというりうこてまで八女の男ふれを忘ものををうり上ふいとくうをくねぢけがまりにおりえをあるバうくくとりへ八男の用をおふ對てよりくまぐ・先男のようぐんをまぐさよりぬいひくぬよ女のあくしらひざあをいうり女の法つりで乱まぐバ・ていひ・ひびめぐ・ぬ中ねのあくらひの法とてをの色けあた女をいまもむるうりさ・あるうりくく

釈　附ふあぐうてあるふをうくくもあれともありん人のあぐるんあ・ん八大事あるぐしとくくのりげあるくぐひと小接ホ女のいぐおりてホへをるるやうのるぐうりさるあるをふといれるるぐぐ・・大事八俗いるふ但しく大ぞるるくくあう

うるさきキットタバシイ人のでうどれかざりとするざ調度飾定
まれるやうあるあをなんなくちいづることゐん。難
なほまうことのもれく上をパさ様ジウズ陶こふんえ
わるまを結る。又ちどころよりよりざでおかれれどす
こぐれよりこぶまこくぶぐくぶさくにおろう撰分次々更劣
まるなるぐんふとも見えるまでぐ差キット蓬別
まで。人のんおよぎぬわらいの葉ふあ海の
いるまるいを魚のさてぐくぷかくもの唐揺烈獣
怒
めのくかくちぬよんえぬわふれるあぐの。鬼頭
おどくくくさうくるのパんよりせ驚々コシラヘ
て。ぷきは人のあ法おどぐ実ダンちよは驚

あるを後こち怨ぎびして見ぶをいうあり奥上のをむけこきこうあひ作り 湖ちのとあーんをうもからんきざみ
をも見すぐーこんゆてとひすぐくようびめ河のすあこうにあこくいひ一段ふ差べる河と見るべー
ヨぶいうとのひあ見ハこ〜 釈このけぐあとハこもかくもうこよりこ下はるとこうていへるあるべー
男のおねあうくこ〜 釈このさぐも奥上のさあふふるふまバ伊氏るくきこせちゃんとあるまおねあうて河を交ハセ
まねをゆれるのさうぐくくんやまーくをひまくふうくこきくぐくくくハのをびくきさんやまーくハ起てゆメうくう
とやうふんのくくきこてのこころ又尚於のさねをあくくこる男式辰あり
あのまぐあれこうをふあうて 新こうせハ博士おく博達の学士あり伝れ作ふ〜ふも師匠あるといへどこハ学問の
情士ぐ学生の海を判ア定あるぐぐく馬ぐ定あるををくくおて奥とするあり
ひぐらぐあるう 玉俗ふ口をこたあるうといあてくく芸式初日祝ふよろ河つまぐくあるくのあれ
まくふふきこ処古ひきさぐおこあひぐらふくちひぐらうむてのあるこうあれおどいとこうれ作あくれあるぐ
なりこあるもロひぐらうハ拉よみを仏あぐくちゃめいひつくるをいへうこ
このここうやまてんこうく 釈このここうこうハ上ふをぐあげつくくる女のこうれ理をりふあくくらひハ孟津
小今人こと泣をーれこるぐこ〜
ようのこふふこくぐせ 評こうこうあぐあるる女と実ある女とのけぐあをあよをこくく説出せうまてこもこ
ぐ一本ふてのあべきこを回ーくくくをこ三まで考をくつのよこぐ実あるくれ一ちぐふむすびようせこれこるまづひ
例のいとこいぐとこのべーこるハこの実あるくこの一本ゆん品宝のむはとあくこあるきバありくる
そのあとあこもまぐまーぬハ 釈こーふいい花とも形の宝まうあるさぶ和ハあり
そばつきざれぐ〜 玉そバつきハ傳の形ありつハ乱つきまつハ和ぐのたきくされぐくハ俗ふちやきこるこよ
てここくこまハうくぐの肌流めきあるけぐこちて実ふ見女のこくあり
ぐふかくもちつべうちうこと 釈そバうきざれ作ハ打見ふふ無ありていうやもかくもべきるあうと
やうふ一こびハ越ぜくくくく系ハ作る人の紀ーうべあへる神あり味ふつけつきはをうくてとハ平尉くの流行ふ去
こうびくいうやうふも作うるをいよ
大きくこて 湖見より宝ろくる格式あるハ多のこのうくれ
うるちーきく人のでうどの 玉うるちーきハでうどへうちーれでうどくいあるく
くくく頂ふうるりきく人と見てく譯人くというハこぐ人ハ実ある女のこくくなるを中 釈案ふ小稚の説

一ことゝのはいとまなくすきまなくあくこと　ハうちもとゝ人ぜくまず人をさゝるふやあゝんまどまれるやうあ絵といふ
ハむりよりの字まりくさ故実のやうあ絵といふことはゆれバとぶ人のどゝのゝひてハさゝらとゝハぬこゝろに
さあることゝ見えられ侍る　風　うゝりゝさ人のでうどのゝ所あるゝといたるべき女のゝこゝふことゝ
いつゝあり　釈　此段のすべてのさハ陪附の歌物がたりハざれぞ和
して故実あるき人の風雅のゝざりとすゝ絵あどを結あく俗り出ることハまたゝの上ゝもあゝでハなゝゝあきハ
やゝふハ見えるまゝどゝふさと女のゝ人ゝこゝとへくゝもゝうゝ女あどハざれぞくゝあざめられゝるゝるゝゝふを
うるべゝまゝどゝこのゝことゝてゝうゝゝゝゝ　玉　彩色をまゝるゝ和ゝくゝゝ絵をかゝくゝをいゝ名目ゝ古ハ絵をゝれて彩色をバぢ
ゝ　河　西宮抄云書所在式乾門内東腋御書所南有別當五位藏人預云云
ゝみゝどれゝよゝゝゝれて　他人ふきさゝるゝゝゝれふ三ゝふゝて墨ゝれたゝゝゝ絵といふゝゝゝ名ゝ彩色をるをゝゝ墨ゝ絵彩色絵と
いふゝとゝハあゝゝゝゝ　釈　ゝゝゝれての下ゝゝくゝとゝゝゝゝ

めでぬるハ（メカシタルハ）ぱうちんるふうどう（オヽ）くしくそくにぶち（キ、ガキ、）
さきまでどなふまことのすぢをこはやうに（実 法 細 密）
かたえる（書得）ぱうてべれ（表皮）さきてこめれど。
今ひとつびとりあくべてんまバ（並）ぢちふ（実）
なんより（心カ）る。ちこのれ事ぶにかくこころ（チヨツトシタ サヘ カヤウニ）
ぢれ。まして人のんれ（時）さふあこうして（キドイリ）をし
きぢ（メカシタ フウナ）むまみれあれなこけをぢえこの（メノサキ 得 憑）
むまくこひまへぢり。てれちぢめれ事。（當 初）
好色ガマヽシク
うくみまバ。（源氏）ぢもめこ所ゝ行ふ中れいこ（寄 甚）
じくちん（信）ぢてぢ〳〵づるこてにてむこひ（居 寄 頬 枝 突 向）

こやうもぢいと下らくこれ付府
湖 ちる汎安位淺ゝし時
評 こよくいおのくのこへゆあし
手をうるくれハくふもるとん
ぢぢこ後海ドこ後ぬるまこて
海ドつひよふ多ふありしまを
ちく海ドこちるあり文のうろ
ひよんとゐてんるぢ
ゆえこぢつるもふ 細 ゆるひ
うのたふてしとこひしるも
まやおも 拾 まかハ片帆ゆもひこ
ゐ同ゐうこ 釈 帆のまうのぢて
こぢまてぐゐるとゆこふつふこ
ぢかこかこのえふてゆぐこてるてこ
こまう 釈 つひのうえとこく共
ぐふとひとまうここ
ようえとふかうこう 釈 ゆ女を
こまりまとゆこぢと又ようゆこハ
ゆひしこさんぐこふのくハこぐし
こてこうくまぢれあうこしとこよ
ぢハ憑方のこふて漫こ多る方
とりゆここゆう
うこまくこて 釈 ゆでゆ句とぢ
てくゆねんこうこつぐくこと見る
べくこぢこハこのゆけえことうぐよ

ゆ居へてゆ。（ほまれ法）ちりのゆ所ん。ぢれこと道理ちうこれ説
きちん（聞）所のこちちするゆ。かつハをうこれ可笑
どゆこるつ（フリフシ）ぢいてこ。ぢのくこ（メイく）むつごこと。ちゆこび（睦 語）
こぐこあびちのこ（コクラシ）ちんあうこ。こ（こうゆ）ちぐいとト
こぐこあびちのこ（止）ちんあうこ。こ（こうゆ）ちぐいとト
ら（龍）に付ゝこたあうまこ。こ女人付ゝうこ。ゆこ
させつるやこふゆ。かこちゆどいこまいゆも付ゝ
ぢゆここ。ゆこ（容貌）ちぢ（ヘウスグ）ゆこ。ゆこ（若）ちぢのすこぐちゆは。（ウハキ）
ちのくをこ（ジブン）ちこ（本妻二）ここ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。
ようこ。こハ（タヨリドコロ）ゆこ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。
まぢれあ（マギラカシテ他ノ女ニモカヨフ心）ちこ付ゝこ。ゆこ（女）ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。
いこ。ちこ付ゝこ。ゆこ（為）ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。ちこ。

もうさせておのつからのをさまるやうなる事ハ教のゝ人ハ男をかくまでもなきゝんとこんどゝきんもあり
てうぶ〳〵ふをぞあらてゆ〳〵ありむ不振捕まとハ仕ハうきけれど。おどろのゝ〳〵とゝへれどかくもきこゆるあり

教ゝ人ハ男を 細 いまゞ宜もばくて年もとりたる男をバ行て見ればくまでハ来てゆ〳〵ハするぞとあり

忘ひいく〳〵ぎうゝゝゝゝ

湖 ゝゝのいく〳〵ぬまゝ
あれてをいく〳〵 玉 おのゞえせ男及ばゝまゝぞをさハ忘ゝまゝ
てきゝゝさあり

きく〳〵めゝゝこと 弄 さゝるてゝゝゝ

釈 遅ゝる方ハてまゝハいちゝれもを出ゝゝゝゝひげむをゝゝゝゝとゝゝゝ
ありまゝく〳〵ゝゝこゝゝゝゝゝ
とゝゝゝふゝびさゝてゝゝゝゝ

弄 ゝゝ女のてゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハ徒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

釈 ゝゝ

でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

これハ男〻女のかほをまもるなり
しるかやうに所のまもりとしてかをまもれ
とゝ又詞の自他さだかやうに牧考ふべし
こゝろもすこしよろしくもあり
玉 はくくハ嫉妬のまもりとしるしなり
さハうすくなのあるあるえもあり
の下へでかゝを加へくらべ〜
さがあさもやめんとゝひく
玉 口さがあれそて信をよにやもう
きとゝりとくさそびさもさがあさ
もといつくハ二つのやくゆやめれと然
らびさがあさハ嫉妬〜てさがれきる
まバ一つすく嫉妬もあのあふあるて
さがふさのやむさそやめて岩
てハやむべくさんとゝひて
まゝとふ〜〜おどもゝひく
玉 女をこゝ〜さんゝあふつゝそすち
ふあるゝと実ふう〜〜とゝあどくゝえ
せそのさあり
さゝぬべきゝ〜さあ〜バ 玉 こあ
より絶ぬべきゝ〜兄ふ兄せ〜ばく
わくおどぎ〜くハ 雅謹 女のゝつ
くゝあ〜兄さあり
いみ〜き浪ふゝくゝも 新 いみ〜兄

もやゝんと思ひくぽまとんこう〜おども里 実
ひくぽゝあゝぬべさゝ〜きあ〜ばかだゝう 絶
ふまゝ〜ふんあ〜ばぽひとゝあんと思ひまく 従
てぽと市〜ゝなきけあくつまなきさはを
ん者くゝまこのちらぶちゝんぶるふかくお 例
ぶ〜〜ふくくハいゝらぶきゝ嫁ふくくとゝもゝあゝて 嫉妬
ぶ〜〜ぽ〜ぽ〜ぽ

みぞてふく 祇注 发位の儀さまく
人ぞずあるようのやと 釈 发位道こ
てく人がゆーを附命もあーんりと結
りくハといふ
のどりふそひあさまて 玉 中方の
米ハさのこ切ものこひられざるう
あいのあぞのくハ 玉 まべて比羽ハいふ
あーんもちりぞ紀行末のそそのの
りれまへかあ様ぞるそもことし
たーぞーしくありて 玉 こりあんと
ゆてそひーふーぞるあり
えをきあぬすぐりて 釈 女り嫉
妬の寝ハえこーくぬ像えて
おようひひくを 新 和名抄指由
比俗云於与比さて方の指でふ位の
指与比とらひくふ李指古於与比と
きるーハ拳ての指をおようひとハあく
まーらひを 湖 朝廷の文公あり
ぞるーあうふめるつるさ位
玉 上ふんぞてあくあのげあれ形と
をうくと女のいくるふあうそいあく
釈 この院のさらゆゆ位のトの字
の院ふるあいとぞーくハ发位の風れ
ふ祇さつけをいとぞといるく人め
ん八人がゆーくあーんのさあり

たるーぶーくしく形りてゆぐげあて事どもを
（馬頭毛）いひさげまう結ゆ女をえゆとさめぬすぐ
（励）（ニクラシサウナ）（洽）（條）
ゆくゆおよひ紀行末のそそのの
（指）（一畠）（引）（寄）（カミツキ）
結りーく紀拳ぎーくうーくもてかる
（ギャウ）（サ）（ン）（ニ）（ウラミ）
きぞそさへつ紀めまバいよくまぞらひをて
（疵）（一デ）（世間ノ）（ツキアヒ）
べ紀まもたりくぞ。ちづりめまふめるたるさ
（厚）（官）
くるぬ。いとぞ。ぐーくゆなよくつけてるハへめん。
（位）（ヒト）（トシホ）（餘）（きざみ）
ぞをるうむきぬべさ分あるうなどいひお
（背）
どーくゆ結ーバるふてハるうだるうあれと
（今日）
（赫）
さいの拳よひをかぐえてまるでぬ。
（カノ）（全ミ分ガ上）（指）（屈）（カヘリ）
ぞをるりてあひんーと結るぞるまバ
（兪）

ぞをるりあるべき方とるさて
釈 道世ぞべき方とるさて
このおようひをるめて 釈 この八今
かのとるべき方えるのるれ指
を痛きれる感めてゆしと我き
ていくるるう退出八源氏八院中ぞ
考ひていくる拳ひ何ぞてゆゆるて
てをるくるる
釈 級貝形ぞ文字八あるひをるめ
てといくる詞ぞふゆてるんべーと
いくるゆるるをれて指をれてと
いるるくさて分のさ八指をれるあひ
ん年月の月紀るをるんてるか
ぞるるあ拳るみの一つや文字紀
ふーあるべきといひくるれのの八
うーるるのるも方ぞるーくるるも
ぞるまあやるるーあをるふくめ
るるさ。やるの辞八ふるるるるよ
て結ぶ格ゆくうるるのトふ九年
とるる辞をひぞーくるるべキ方そ
結ひ書るるさえひ方の紀詞注ぞ
しるーるーおるゆ詞ぞべー
えるーみーるるー 釈 あるるるの
れふきーてうるるーもるるしぞ
今別るるるもやぞ方をるるーぞ

（泣）（安毛サウハヱモノ）（今ヲ）（今ヲ）（此）
れひとるやハ君ぞうるるふ。ぞるうーみーど
（今ヲ）（全ヲ）（ギ）
などいひ結るまぞ。ぞるみすぞるるちるの紀て。
（女）
うきるふ。ぞをんひるるふうどへきくるるや
（今ヲ）（コラヘ）（今ヲ）（此）
君ぞてをわるべさをる。ぞどいひーるひ
（手）（別）（今ヲ）
結るーるど。ぞるるるるるるるべきるるゆるーを
（実）（変）
ひひるへぞるぞ。ひどるふるまでせるるるも
（フオトヅレ）（臨）（時）
ぞるはさぞ。ぞくどれまるるりくふ。ぞれ
（ドコトナク）（ヘドヒアルク）
のまるれでうどれ。ぞるけていみどう
（祭）（調）（楽）
みぞまるふるぞ。ぞるまるまるるあぞるく
（散）
所るて。ぞひめどーせぞなるぞるぞるとるるん
（ヤハリ）（今ヲ）
るるるるるる。肉紀るるのるび
（別ニ）（アタリ）（族）

とてもなのいへるくさのあるをもさびふるかくなりて折おきるくこの頃も花屋はいとぐく列ふいとべ
うたかもとうく　釈　こみうたかうハ上のかはあぐうたかうしといへふつたく都てうたかあぐくしきをうたか
といつるかうさんをのあぐくしさうたかうをぐ歌ひたるをぐとい
ふハ上のかふんぐふまびといるまあうくく一つ二つとうくまうくふうの
附ふいうてつひよ思ふ列べき附節ふるかしうるかんと始きうるくまを列るといへるハ今俗のうかも手引
あどいうぐくうどおうくうかるをうのまを折てといあるのふあうていへるかうこやのやハいひうてふくも
さうナランのむかくはびうる搭かうこのかも花屋ハきびたいひ
いひしうふ　画　うぐひよいうるかう　釈　まうひハ辞かくひきまうひつたしうひおぐめまうひと向ドく互ふまうさく
あくぐんまうりかうくふ　玉　方くのかれのとくかよひあうくくあぐれとうのようべとをくるかふをかれうるかく
ひんぐのまうとハやかのすくと十月酉かり調乗ハ年の日かう大内うてあくかう
ようけていうぐうこぐれうるか　評　式三句オかうくくてすでくし　関東のかくぐかけくくうぐれかるるぬ絵くうかを
ひいいぐくうくんをを起さんまうくみうたぐいうくとうのべ　釈　こぐれハかるまぐやの初くてかハるとのう
こうれうれまうりあぐくすハ　釈　濃ハうぐかうくくくうるかくこあるとうりんうくう
あかあぐとふりんうくハ　玉　うのかをおうくくれはうかう　釈　うちハ林中くく林中あうふひうひせんも不用うしたとうさく落寝ハうしかする
うちうくうのうびかも　釈　うちハ林中くく林中あうふひうひせんも不用うしたとうさく落寝ハうしかする
ぐつひあれバいへるのくくもてさかくハあうさびくく不用あるうさく　新　あ落といひ出せよう落ひとうう乱ふ文あう
うくさぐあるあううハうく　玉　こうひの幸ひふうくさぐく関係あくんあううハあうとけうくくてぐうたく
きうくんとく
いうぐおかつうとうく　玉　幸ひ歌ハんやうくうちとけてめる歌くくうかきまとうひくうれ女の表くくううく
うくうくくもんぐそくうかく　釈　さまうくうく神る代くく　餘　うつぐ物語義ひくさのそふ謙ハうくうせうと
あまくくうくうくうれど　釈　神る代くく　餘　うつぐ物語義ひくさのそふ謙ハうくうせうと
のくまくべえふまでつうひうくさうふ　細　神る体あり　玉　やくのあきハ俗うくどうやうとうふくうくぐく
さうくくもうとうひうく　釈　さいあうくもふ夜あひうくくぐうのあ俗ぐくくく

あるてゆくえもの辨ふをなべし
ひるやごりふ　王　ゆ海ふ直醍
とある字のごとく後のうてとも
するとともあるてその系とふこ
ともちまぢらびすふく
まやうのさへやとのはらりと
いつのよりふる系やの屋のさより出
るふろ
系をうとらゆと　王　系ハてるが我
あうこうみゆとあをとうへまや
とのふさくあをとの系とんるハ
ひびこくさくハ系ごとのふいく
づあるをやうれハり傷よんを
ハたる男のあるよりていうう
とあうーとあをびたひーまやとい
ふさすてけてあをとハのるれこく
ムとあくるるあひーされいとあー
ます行ーくく。　釈　波月年ふるる
あひーざあ。とづけてふくるいひぶ
こくくるあひーとよみてふ高いと。
とよむびーいとびてうつくく
海あー家のさあもあまりを形
ふ繪てありーく
月ぶ見すくてん後をさんえん
王　ゆるるハ女の系くこれも人のを

だうりあるくぽおやのあるよぷるよさりふ
ん月るりあぬるとるくゆりぷるんあるうも
よすぷぷそるさだあるせうてもをぐ。
いとひるやごありふなさけあるりーるば。
あくあるくこちーてぷるくあるーあるし
をぷ我をるとねとるるれんやあうえん。
とさーも月あくべりしまあまどぷんやまー
きまーに系ひ待ーーんぷきるべきあたまー
ふりもんとぷめるるるあひーさあいや
あーまほーてさひるよるぷ月ふてるえん
後をさくあんぷひやうーるるーるし。

親ルスレテ　夜今　艶　哥　消息フミ　隠屋　キモチヲミセタル　イヂワルク　疎メヨ　ムシヤクシヤ　着　衣服ヘ　様ツキ　ツケ　馬頭ヘ我ヘ　テモチブサタナ　後見

ようるるさをふくわるるるるる
ふるるとハりるさてんすてとふ
も俗ふるふとハふるくーるるてて
こまこハうーるるすることをすて
やむるをるるくるるべー
ひ合をくるるべー
とくるるひ待ーを　釈　ふるびあひ
ひんあどるひやるーるるべー
るるまるどハさんるも　湖師　河彼
系をふるんるあるちーてるるるるる
ざるしあの山里あどるるるひるるれて
人をまどハをーやるに男をるるよ
まどハるんともるくきあるるざるし
とくるの駅をあるるるるるひねるる
をいるひくせーるるさるあるぷひ
ムをあるるるるるべー
かるやるーかるび　王　るんが方ふう
とかるるるるるのるるるのあるるる
るるるあるるるるるいるる
るるるあるーるあるーハ　釈　あるまく
るまあるくーるるんるるるるくる
のるるに系るあるハ　王　方るくう
るるるをやあるるるるるるるおるるく
をるるるう
作あるびるるて　王　るみ河ふ月るう

さるるるるも生るるるる絶ヘ馬頭ヲ
と思ひまるるくるるるるいひ待ーーをるるむき
もきるるるるるるまるるるさんるもかるれるの
びるるるかるるるやるるるかるるるいるるるるるるる

ぬぐ〳〵ちんぱ四ひろへいでらく〳〵たちまちまたまたまた

あゝどうぞ
のうあひつれあくぞうぐゝうぬハ佐ゆ
ソノトキ　ニアハシカラズ　タシカナラヌ　チト
ぬそうあくきんぬるうぞあかさるよ
光映　消
ようわかうさせぞどよちぐうわうゝれ
（書ヨリ）定
ぞやといひちゝやゝ行ふ『さておのごろ
（アリガタキ）　（三ヶ月ノ）
（乙）
まうかようひゝとろうぞくもうちまうう。
ユキ
んぞぜまうとんにゆきありとみうねぞく。
うちよくこぞうぞかいひく佐ゆおと。
哥ヽ　書ヽ　琴ヽ
てつぞちつぞこれうどくゝうぐぞゝみ
オホツカナカラズ
書ト琴トヽ　哥トウタフ声トヽ
きゝわうう待うきぞんうもこみもかく
佐うゝうぐぞこのさぐるあのを折とけうゝ
指ノヒタル女ヽ

えんよこのもうゝきこゝハ
細あぐくゝきうゝれゝうの也
うゝぬとゝう
ゝうゝうせるゝぞ　釈ゝうゝうせる
人ハ即下の殿上人をゝう
あるゝ人ゝきのひゝく　釈て伝禁
中より退出する時一人の殿上人来り
あゝせてゝる所の車ゝ相乗りゝる
大納言の姫ゝ　弄　後ともゝんを也
ゝる所ゝうえんあゝる人ゝゝるべゝゝゝ大
納言とゝゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
父ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
式人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
釈式殿上人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

大納言殿家よまうでこんとすること。
この人殿上人いふやうこそよひ人まつらんやど
なんおやしくんぞ殿上人とそこの女殿家
たちよりぬみちのくにかんぞ
つまこよひ池のうらびんてこ月ぶふやど
るすこう殿上人ぞ
ぬ。もとよりさるんをとこいせる
まやあうくんぜをとこいてこそぞ
てかどちらにはこのこぶろ扇よこの
うもて。とぶうの月をこう。菊いとおす
ろくうい設ひわうて。殿よきほんぞ

殿上人 待 モテタ ヨケラレヌ キニカヽル 湖 木枯 荒 顔 影 宿 車ヨリ 元 来 通 殿上人 イカサマ ハイヤサリミ 廊 養子 メク 尻 アラソヒテ散ルサマニ

みちのくぶれあどあそ殿とぶふ見え
こそ。懐ぬところ月ろくるふえとういでく
ふ見あ。かげもよ。などぞ。
うこあ殿ふよくある月ぶんを古くべ
こそのへ中こうるをぞうるこそくこう見あハ
せこうこ。ぶ。ふ異ハあ。ぶ。律ぞ
のこそくべハ。女殿扇やこくこよう見あこて。
調子 柔 撥 鳴 内 タウセイフウナル
こそのうちこよりぞえこうるぞ。ぶまあ見こる
あ殿こぶ。ぶこそのくすある月ふをこう
音 清 澄 時
つ見なこうこ。ぶ。をこいこくあでこ。ぶこそ
フツガフナラズ 殿上人 感 簧
もゆこよ。ぶ。こきこて。庵の扇ふこう。
歩 来

湖 ぶこう人人本拙の女よんをを女ぶ
こうふやとくをこうふハけよりを
見ぶうてさこぬやこうをてこるか
殿上人なくこをを本知
とぶこう 湖 ぶ。とこうこ
こうこうぶこうこうて 釈 ぶふこうこ
こうこうぶこうこをこの赤くあるをこふ萄ぶ
こうこうぶこうをこをこもこうこ
てハぶこくこうこの付こうをこふ
あれとぶふ 釈 ぶふあうれと
見こくこうこふこ袖紙く
かげもこう 河 俗こ糸ま扇
ふ平ふやどうハもべこげこと
ミこのひもをこ。みこくきもこう
苑 あすこあの見れげもこう人末
の張こくこもひ宝水ここまくこハ
こふこふ草こ 拾 新ぶ井ハこげ
こふ日記よこべこ大和の物こ書
まあり 細 ぶあすこあをこうこふ
ハふこもこ。このこをこと
つこうこうこふ 餘 ひこくこ
こうこくこぶこうここべこ対ふ
らこべこ万葉五堅袖をこうつし
こひまつひぶまここつこうこのの
いこをこうこ見こ

ぞふふみとりけるあとをまぢかくあるまぢかなる
イカサマ　踏分　跡　ザン
しるべてきくに菊をりく。
ネンガラス　菊
琴　なほ人
つまこあるひのきるもきくもいろあるぬやなるぬ
十ニトモナイ　月　ヒトホリナラヌ
あるひとをひきやとめるるとうらえん
琴ノ縁　留
人のひるるとるくぬまみのこいまひてなど。
莫　遺　聞　栄
いくくあざれうまだ女あういさうたく
シヤ
ろひくく。
女
あざしよ吹あひめる笛のきるとひき
風ノ縁　琴縁
琴ヲ兼
杜
とぶむべるとのちぞなるきぬとあるめる
ジヤラ　キ
かちひよ。ふてなるをもちでゑさう
ア　フ　馬頭が心

ちぐるくるうをを
王　う山てうく間まとあらせるきさ
るまをくりられをうひくとして
ハ下のうるあらせさしとうやとかう童
あり又とめくといふるもいうぐ
うさあらせてうしやと
釈　琴を掻ひきて笛ありせる
そうハあるるハあやうるるつき
づきしきさく
あるらめちくべハ　細　孤ちは律も律の
ちく律ハ秋を司るく又律ハ陰な
まハ女のうくし財ちくみを月ちれ
バちうくあるあるべ〜　釈　このハ
況さるるべくまど陰陽のさぐま
でハあ〜ぎるべ〜さく律の間まそ
女のやハ〜うるるまふるるあるしさう
まるの巻のうちうやそうが
今ちるくうさるるべ〜
ちのあるちるて　河　秋ちるれかこ
ぢちやぐふふりちるるるるふ
るひてとふ人志　古今集
う人ち女をうるるが妻とたてね
どもいうさまるもち女人のうる
とすているく　釈　夜のあるまる踏
おうう記ありて人の来うるるな

ありとふふうを却てなりとひひ
て友をきうせてくちをーぐ〜
ちるさく
神さまます　王　神さまーむるく
徳南さふるべてやハるど神さまし
ちやれバ性ちさふるどくねくま
ーぐハはうるるるしまふるもを
菊を折て　釈　後上人あうの菊
ちれるあらておよもくさいひと
ちるく
うるのるもうく　釈　一そのさハ
かちひくるるのるもうるるる来の
るもるでるるるでうるるるるるるる
うるるるうるるるるるくるるるるるる
くるるのるるもるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるる

ふなのかさやうにもていぐるる サシイデ
こゆはいとあやしくあれもてぐるもの 奇怪 アテニナラヌヤウニ
わがぞえんはうき。今よりのちぞ。
さのこなんもひ給へらるべきぞ。ひんのまく
サウバカリ
ぶ。をつ折ばかりぬ。ぬぎ。ぬ。ぬ。ぬ

いづくよ　国いづくにか　細おもてもなんあり
おいさらん
ちまきのの拙作を　国あるものの
小さくくるのを早下してかくハいる
釈　ものハ愚なるさまで俗ふる
ことばのといふさく
あぐらめ　ぐきものとも
釈　あぐ〜ふハ永く月日を経るさま
月日永くあひたんのものも思ひぞ
しらどく
さえぐ　湖　絶ぐ〜ぐ〜といふこと
うくめしとそのもの　釈　女の中ね
を渡らふすふつけてハとぐえをす
をうのぐハ〜めしとそのものもあ
らんと中なのおいらうて言ひやる
ら〜らぬやくして　湖　とぐえのて
さをもれ〜らぬやうみてく
くまそうあるくとも　釈　中ねをかく
ををまさうかうのくのごとくもも思
いぬさるべ
ものてつぐ〜んえをあふんて
国　ふ頃ちくそいあがつ〜ミ
てをうをを形ぐるやうよりもち
らくくさうあふんぐ〜さく釈タ
よいつもくのさく

あやまちしてぷんんのうあかるれる
名をも。中ねをつべたものなかといまむ
中ねをこのうれづく。黒すくくさ。
さくくハおぼをべうめり。いづくよ
つもてもぷんわくもくあうくる清
拙作うを。とくくうちくひおきこうば。
中ねなわぐ〜ぷまめくあぐうをきん
とくいとものびくみてあくくんの。
さてをんつべうしらひあうくば。
けくなぐうふべたものとも。をひをへざ
もくうどぷまあくまにあれとあぼ

うのあくくうのどう
釈　さのわハうのをさ中ねうう女
ふ行末を渡まむるうぐくを
しくくうとうるハちう渡くうくく
年月を待ちうるく
あぐくて　釈　穂やうあうさく
このりをふうくうとうう
釈　このりをうくるとハ北方のんくると
いのさくてふの方れるく右大井の
作女田のうく　鑑　ものの拙作ふ右
近ぐ拙作ををうこのの拙作ころ
うのんたたなういとおをうくく
年のやそ、おうでうくふくの示
よりめのとれすくく待るれるんたひ
うくれすと」といくぐこまく
をすあいてせ　釈　あくふハいそで
をれをふたちをやうふまうていハ
せうく
ほふこて　湖　以中ねをを渡よして
ぐうとうれば　釈　清緑甲しのど
渡ぐくこう　評　ろうくこのせちうう
ことをとれ出く清ぬをを中ねの
渡ぐれくるくの目のおふをぐ
体氏をの問みのくることを掛くう
さくくふぐくくをあるれ九段く

ぐうぐぷくくわすまこぬのようひをん
しをぷちぐうのふなまぐ。うちまものをる
ちくをんくあくき。このむをつまて。ぷうくあ
しとうあまもあくんとんあぐうまぐゆ
ねをうくあをを待くくをぷくうらぬやう
ふくぷひくくたとぐえをも。かくくあぐう
ある人とと思ひくぐ。まぐあさゆふ
ありてつをくくんううさあよみえうく。公
ぐくうのぐ。まのぬんをくるまぐも
あわ紀く。おやも好くいとくんがそぐよ
て。さくぐこのんくくとさとふふまく。

○さくさ本

いさや　餘　いなや同

玉　源氏君のおもしげに同きふつにく
いおとこまさりて侍るもしげきなりのみ
も者ろ〳〵のとも

山がつの垣ほに咲く撫子の
を車下にてとゝまりて此ハ幼兒の
うふさとくさて我ふハ心清く
あるものゆゑもはまよはあれをうけ
ゆくといまさとおとゝいるハうけの
いの同の縁ぜゝふさて〳〵の
見ひ出まつに　釈　おををうそ
ようて中れのもひ知れ
むのゆふきかへるそ
玉　ものあくふおそ〳〵ぞきるひく
ものゆふそ〳〵きく
むし〳〵　抽後あれて　釈　若抽後の
さ〳〵ふ抽をふ後けてうれる
そ〳〵さまよく似てもがそ〳〵とゆき
ものゆ旧後ひぐとものー
されまぐ〳〵　釈　今うのお載
よ世まぐまてあるれハ〳〵れぐ〳〵と
ともろうひども和やをうとをふ
及ぶものの〳〵といてあくをきあのの
らくうれとゝ〳〵れうぬ抽〳〵あい

ものくるそ〳〵
のどそれよ杉ぐ〳〵て。ひさ〳〵くまのら
ざれ〳〵ろ。あの見ものあるわるのよう。な
ちけあくうて。のる手をるんさる〳〵より
情　ヒヨンナゲナル　四君ノアタリヨリ　便
ありくうまんいるせるわくるはふこて
ゆ結う〳〵。ふさるうれてとやあうんとも志
ら〳〵ん。ハとすれぞあぐう。せ〳〵てこあども
せで。ひさ〳〵結う〳〵ふ。むげよそひ志を
一向ニ　湖むぐく　幼　児
きく〳〵ぐどうれ。をさるれのあど
もひうう〳〵ふ。おもひわづ〳〵ひく。あぐ〳〵これ
花我をうておをせうしとて涙ぐみう。
折　コナマヤリミ　乙　麓　麥　中将侍ら

源氏物
さてそのふくれことぐ。とひ人へバ。いぐ
詞　ヘイカニ　イヤ
やこやあるこもなうきや。
モウカクヘツ　ゼ
山がつのうれかあるこもをわくに
荒
あれそうひよあぐ〳〵この家ぐひいぐ〳〵
愛憐　露ノ縁　例
まくふまううしうぐ。きいのかくそこもなき
オクソコモナキ
あのうう。あまてる家れ。高〳〵ぐを成
荒
なぐあて。むし。のひよきく〳〵へるうう紀。
虫　音　競
むし〳〵抽後めれくおぐ〳〵侍う〳〵。
所中抽
されまぐるれそいづれとうれひどん杉
分　ヤリ
とうるかよ。ちくあぐそのれ。やとなぐ〳〵こ
床ノ縁
をバさ〳〵抽れてやぐちうをぐふ。とおやのふを
先　母

あるさまをいとせちなるとおぼしたるもの
うてあるものを見るに思ひ出でたれ
しむる物もあれとうきさとそふ
といふハとぞこのうあしきふう
さてあるとれ御ようさしいと
ふるとれべうむ物と云ふ者
の物ぬぎをうるふ物ぬぎをん
をとくさる時をもとうと
いひさあり
あるぞをのしもとしても
釈 医をおさへ思ひてもあるとれある
さるくに女のさねふべー
いとをぶうくくく 潮 公中納の上絶
のつきをひーをひーをもおるく
うれそちて 釈 うれハ伐の殺物ぞち
ハ消へ絶を消してあげうせるく
ちぞ世ぶにぶべうるれせるて
釈 上の世ハ祝世のうるて女の世世
よあぶバといふふハのせハるふつれ
さる境界めるて女の不幸をき
しくく
あれとをひーなぐふ 釈 おど間の
さくあるまてをひーあぶふくれ
うきとたバとつるさて小物ふあれ
とをひーなあるくとあるを

ゆくれ。
女
うちちふ神もおるをよとこなれよ
夏ニ添フ殺トイヒナシタリ
あくく吹ろふ秋をきまるわとろれ
十二トモナゲノ
ぶたいひあくぶまめくくうくみ
シツニ
くるを海もれをぶ。おみぶをあしはて
漏
てを。いとをまづくくはるまげふまだろう
ちくうてつれをもろひをんうるわと
涙ヲ
ツレナキ
ふんをんハ。ものかくくくさ。とおひ
中待二
メツタメニ
苦
くるぶ。んやをくくくまをゆぶをん
再
おを待くくぶに。あをもなくこをうれ
アヒダ
跡
うちくくうせあくう。まぶ世ふあくバ。をろ
消
フチモ
亡

いぶあんさてハおくくふを後流
めをてふ物考ふべー
顧 とをををいと深くおしてふふ
ふあるをぶ物ふもいひぶど世を
物のづくくるのあぶくもあるて
とをべきふとを 釈 一ふふをひぶ。
をれとあるかるてハをづくくげよ
をくハかのををうくくをあるる
をくを世をるるのるて世ようまく
ふむつくくいひくくを惑をれけ
くをを中ふをををさをとい中をを
ふるをるをるをうく物考ふべー
くもあぶくるぶくくまー
潮 をくふうれ出るやうふハを
まぶれとを
さるりのふまるあるて 潮 中世ふ
らぶをとも又一方の物方ふもがぶ
られてをのをひつる
潮 をふふふをーていへる頃ふをん
ふ物をぶーてくーみのぶをるを
をるをんをーぬを物ふをのびく
あどいひくくるく
あをれををぶうも 玉 絶ざうも

○さちき本

なれ世ふぶを流落すくふらを。あくれとをひ
ナイ
くくぶに。ふをぶをををををををげふをひまをれ
ヤウチ ジブン ムコ ツメ カダツ サウゲ 纏 イド
くをきんをまくうバ。かくもあくぐくき
ヤウス
ばくまー。
カクバツ 中絶 サウオウナモノ
よ為成をれをくこのからくくをりくば。
カハユラシク
くれなぶをくなのぐくをんるやくもをりるまー。
いぶでくぶをんとをひをふるを入くふをて
ドルガシテ
少つけをくくねをまをくをまひをる
ナニゲナイフウデ
をくをれををあくなあれ。ををまなくて
女
つくくとをひくるをもをくぶであくれをを
ツレナイ
ざくくを。やくをれくをれをひをくくを。
益 片 思

もとゆてとおぞやるやうぞけも
めまでど御ゝ上の文ふるこさう
ごくかくまこうせこ接までもあ
れとおうこと結ざうしうゝ
下ふ今やうくちきもくきハよ
とあるをもおぞべゝ
やくあさうさおひ 国これハ
をバふく恨うてかれうせあ
ゝの女を出方ハ拾遺ぞあハ
きとおハられ月見とふのめ
あうろうと一段の行ふふく
まていへる初次のおふくまうさ
えもさことあるをもて実ふ
月見ひといふよハあゝざることを
おもべゝ
人やうゝ〜ぞ 雑歌 あくうゝ
人のよゝ〜ぬすをいよ
むゝちくき 河風ゆかりひの
きゆる知ゆゝバとかくむひこれ
ざゝそ 反撥千思千腸熱ツ一
念一心焦虚仙窟 釈 この侵ハ数伊
のゝ〜ぞ物をおひそれむおのれと
ゆ 心の焦ゝまでおおふタべもあんと
えうゝつまゝ〜く 国 さまつハ男の
世をゝまうく上ふさんゝうゝ女の

今やうゝ〜ゝ忘れぬくきぞふかれたゝえ
ゝ〜ゝ也思ひたゝるまぞぞをりゝ〜ゝやゝ咏
らぎぬむゝ〜ゝ我ヲ離ぞぞ焦ゝゝゆゝべもたゝんとおゝえ
待ゝこまゝ男ゝゝまゝ〜たのゝ
ぞあ紀ゝゝ長ゝゝゝ〜ゝ〜ゝ〜

伝へんといへど頭の黒まめやうにおそ遅
とせあるへだてあるを中をいとうきさんと
ゝひめぐりてうきを」まぐ矢筈のちやうに
伝へ聞こしめしたうこの女の中をんを
おかぬやまずとともいひあきせ。わるくし
ざまの世ふすまふだんおきてをとひ
めぐりさんうこもいとうぬくぢをれ
きそ。なを中なりまくれちうせをばりくすべ
てくちあるんだるくるん伝へうぎうし。
うまはあるもをのめとふがくとん

霊異記吉祥天女の事ハ釈三本ツ

のうたてくゞ和泉国の血渟の上山寺の吉祥天女の像ふるひとりけく云くせ〜ゆるも又様衣のあ伝ふまぐさ
かるるかふりつる物をいらぐうるる吉祥天女の〜ん（釈）やゆけんとそれバとある伝の上山寺のるをとゝ
やうげづきこんすーかんてを（釈）法華経併之法ハ仏法の験のうふつるくいてるて霊妙不思議のまをきて
ひりくまーハ中霊験の奇異さをいふ物にて万物ものふるおきものをきて
弥勒菩薩ををひけんこすれバ又仏法をまあるて弥勒菩薩時ゆんがとびーとゆるるてすぐてうに女のうがうにさ
武弘ぐ弥ゆぞこう（釈）以中ハの物ものべーそをきあるハてあるておかーうきをのといくんぐとー（評）この
爰武弘ゆをこうをいうて初めてあーうり出されさるうーゆをーに人いるる伝ゆ概略ごとくに出るー用とて
よ初めく後だーて上ゆきゆく弥ーくるるーるるものをゆ紙をきりーくーくゆぐーうーるるーされバ
この一段ハ弥天ゆをこゆ〜くうらゆまて人の眠をさきうつぐかまてうけ不当夜のあるゆ伝をあーうる。
第十の段終り

ちりぐちりの中ハうく

（釈）上よりのきぐこといふきハるゆきぐ弥ふみくうぐうーとあるるぐふ伝ゆうを
あるゆーをとうきさんとどひめぐーをてよ　玉補　玉篇墓云とうゆハ八十上ゆとのあぐの冠ゆうし（釈）とうハ執ゆく
後世ふ執ゆあぐいふ執のをこをきて伝ゆをひめぐーれゆ。ゆまぐうくとつぐをる伝ゆ伝ゆ弥ゆて執ゆくぐ
伝文ゆぐーるるゆやちりーくく譯注のぐーし伝ゆをとゆくゆあてをとるべ

文章生

（釈）職員令大学寮律学博士二人已上同助教　明法生十人文章生二十人　筍取雑仕及白丁聡慧不須限年多少也（釈）儒家の
人ハ皆大学寮ゆて学問ーて後つぎーくゆ出身をるーるゆ
ゆるゆのーうるゆうゆ　細　ゆふゆゆの出入ゆつけても公私の人れをぐゆんひゆうれあーれるれめゆるふもるる
あるゆふ体をうーとれ人ゆーをぐーうちゆうゆぐんゆをーいゆ
ぐーうのをき　玉　ぐーちハオの字れゆるあぐーゆ伝ーいるーゆハつまゆも才智のをゆハあーぐ俗ふ学問のある学問の
あをゆあるぐいふ学問のゆくきうくゆぐーいるんゆぐーく
あゆーくの特士をうーくーう
後御ゆぐーくーんゆもすぐて人ふ日を宜をてゆのをばいゆ（釈）古女の学問のゆをとゆをばゆをーゆ士ハ礼ぐをとのをて口ゆあるすぐくをハ
えてくうゆの伝ゆ物ゆを伝ゆ士をとりてゆをびーる勅ひとゆるべーをるゆをもくふゆをびて出限いうけるゆぐーく

（釈）職員令博士一人掌教授経業　課試学生

ゆくつ伝をとりてゆのぐ〜　湖師　これもゆ文章ゆ主人會良媒置酒満玉壺とゆひ〜酒をゆ〜

○そてきま

置酒満玉壺四座勿飲聽我歌高徐富家女易嫁嫁早輕貧人夫貧家女難嫁嫁晩孝姑聞君欲娶婦娶婦意如何

（評）世上といふものゝ人をうるゝ辭し

（釈）拘りてさしの父が性生がんを怖りて

（釈）うゝ〜ろこ八用云し女の式アをあつれさるひく

夫婦とりのこるおのゝ〜ひくさのもしとのさて

（釈）消ものゝ

（玉）低生

（釈）天腹体

（釈）年女を席

（釈）

（釈）これもとめき

（玉）こゝ

（玉）

（釈）

（釈）

（釈）

（玉）

（釈）

（玉）

（釈）

（玉

上よりのつぼねをもてよく考ふ仮名一ふしもあれどうまてこハ学問をぐのたぐひをいふことなんてのことハ世中よハ男まてもて学問あれりハ仮りとといつるもてまして女学問あることもあるべふすらあるんのさて後世こふ面といふことよ涯こうてたりこのさまうるひ

釈 学ふいとくまぐ〜うまぐ〜くたの仮りどものごとくんなてあるべしあのゞ考ハ仮報まいつ

のこうをといはせんこうて 釈 女のすをいひさしてやこうるふのこうれまをいはせんとて誘〜うんくんいうをあぐ〜をあのをこうこう

釈 すちしふとくんなぐ〜うまぐ〜とわこうふをこう〜くこうあれあうう鼻のあこうをこづをハかとううふをこう〜ひこうをいとこう世の俗仮あり

うねのおとみおこうこう文仮〜で

釈 学ふ学女のおとけてすむ学ハあ〜で別あるふるて仮まあどをべよこく判〜こうくあどこうとふいづまるあを備てあるこ

うくくあんんこう仮りぴまいて君ぐられ況
仮学ようぱぐ〜くこうくこうあるレツカリトシタ
仮こ〜こうこうぱのうはあさせ仮さん。
イヒガヒナイ そうあう。ぐちをこ〜どかつんん仮こもぐ
ヨどぐんよつさ。さぐぐ宿ナガラ世カタテニハのひくこう仮るあれ
キニイリエシ
ぜ。をのこしもなん。仮細ワケモナイ仮めのハ方
男子ホ・ド・仮るとまこうせバ。めこうをいもせん遺
とて。ぜ学おだドルねこく〜をこ〜かけるオモシロ女こう乳と
すこいこうあをぐこうこうえこうあぐこう。さなれ臭
誘 あこうをこづ仮くこうこうあこう。さていと式張行
イヒ
こ〜くまこうぐこうこうふ。のの学をよのこに
コトノツイデニ

釈 やぐこ〜こあをこうとこ学
さこ〜公俗のこうもいふ〜こ学てゞス
又ケタガラスをこいふまこ〜
まこよんふふこうこう 釈 あまぐ
こうをふあて中仮んふこうき附こ
とこうふこ〜こ

釈 学オある女れハ
この学女人と報まていこう
世のこうこうをこひこうて

釈 こうこうこうこうこ文仮〜で
いこ〜こハ仮学ざぬの何まて中女のオ学
あるをこうこ〜学をこうこ〜世間の
学をこひこうこうこうまて恨ぐこう
さこ

あこもこ〜やこうふく 釈 よのこうれ
女ハ男ふあひてハあこひこくぬのふ
こうをこ中女ハこの仮ハあくあぐ〜こう
いこうこう。

あぐ〜 玉 腹病風病二法のこう
ち風病のここう巳の久〜春記ハ
長暦四年四月十四日云々今日搗服
韮草依風病也とあこうこうぐ〜こう
こうふちのここう〜こうぐこうこう
女のいのぐこ河まあぐこうこ中女ハ

中女家三
ちよりて仮まぐぱつのこうちとけね常居
こうこうまハ仮こで。公やこ〜仮あぐこ
キムツカシ仮物越
こうて。ぬすぐるこ〜ぱこ
ケイブタガラス
をこぐ仮ハカラシク
こひこうふるこ〜ぐこ中他ぐこ
ものをんじこぐこふも何こ世のぐこ理
賢 軽々道
をこひとこ〜こ仮こぐこ〜こ
こうこうこ〜仮こぐこ〜こ
きふこうへこ〜ぐ極熟草藥重
服 堪
ぐ〜こ〜ぐこ〜こ仮こ〜こ
面 具依
めん中こ〜こ〜ぬぐれこ〜こ面
顔面

せくことあるもうかくいふあるもうさ
まぜてこしらへてつかふものの
ひもこそ〳〵くさうぶもくさ
さまをこしきしふかくもこゝろ
式抱ばかりなどてあるこの何なるかの何
あるかのくさをもちうをつ
くべし

ぐゝねちのさくやくを

餘和名抄云大蒜本草云葫音胡名味辛温薬風者也兼名苑云葫一名雞音雞大蒜也細土用のひるがのひて
茎の用くすれあるく釈細流のぬ
くくを俗に黒子の茎にてくるく
さいバ極熟のこゝろ用くる草薬と云
ものゆゑ蒜ハ今ニクイといふ物にて効
おのをなる茎のあり
いとこさにをよのう釈ぐゝねきす
くふそぎくといひくる洞し
きものあるゝあるべくも湖東洞目
よゝらにをもし
ひあるれるよ釈あるとりく
るハ清水の粗すをとをしんとい
へるぐゝ式ゆをあるとあれバ
何ゝくハ玉蒜を抜くくるもの
いとうゝそゝづにあくやそれて何ゆ

ちるべうんざ雑事ふぐ〳〵ら八ぷうげ絵ちゝんゆ
然
いとあるきてよ
何ゝうハいそれ
ゝちゝ出何ゝる
この香うせあん時よゝちゝより絵へゝとゝ
失
やゝにいふ紙ゆゝちぐゝさんをいゝゝ
靖
〳〵ゆゝちゝゆゝにらふべゝさふちゝ何ゝねぞ。
ナルホド
つゝもさべなくくゆげめ紙つゝひて。
式抱
さゝぐふのふるまひちゝにゆふぐ抜ゝ
蒜昼
ひゝもまさぐゆゝくせといふぐあゆゝさゝいゝなゝれ

返答
唯義
高
添
香
追
走

いゝふぐき何もあるもう
さゝぐ〳〵くゆあるくん
湖東洞目ふのいゝゆゝゆゝをひゝん
ゝゝやゝゝいふを
湖式アをゆゝえゆゝくゆゝをよゝゝる
くゝひゝくゝゝゆゝをんとする
ゆゝすぐゝんもいゝゝゝ
釈ゆゝぐゝて知んもゝすぐふゝゝ
しくゝゝゝもゆゝゝゝ拾いゝぐゝをゝ
あゝねばゝゝゝゝ

ぐふゝのゆゝひゝゝ
ふゝのゝゝゝひゝんハいゝくゝゝゝゝゝゝとゝゝ釈安ゝゝゝゝゝゝ

いろあることつけどや　(釈)いろあることつけ　ちゑ蒜くひてとハのみぞやと若やうこゝろひさるゝこゝろけハゝとつゞ
といつゝふひとうく事ゝ詔てとくいあくくも
おひく　(玉)追てゝて行ようくふ追ひけるせくゝ出ちをやゝこゝ何ゝ出女ちひ出てといてハひゞくゝおひ
てくハゝゞくゝあくゞゝも行ようあるゝをいのゝあるをや
あるゝれ丸ゝ　(題)歌をへゞてゞむつまりくゝまゝおゞ豆間のゝゝめも草草のきするゝ
をもあるゝおゝゝゝゝゝゝゝゝ　(釈)をゝゞ母ゝきあ伝ゝれバあるゝ
きゞくくゝゝや世ハ　(釈)をゝゞ母ゝきあ伝ゝれバあるゝ
くまゝるゝてゝすくくゝをゝくくをゝゞ母ゝきゝまをあくくもくくゝ
おいくくゝ　(玉)佐あるゝおゞんゞやくゝまゝといつゝよくくあゝれゝるゝさやゝうのむくゝゝきゝ女とゝわんゝゝゝゝゝゝ
よ鄭とゝひおゝるゝてゝまゝくゝめゝといくゝ
あくゝ　(玉)海ゝ淡とあるゝゝくくく

くふつけくぷむげふちゝびいとゝびゝ。も
あゝん。ゆざゝとあゝひゝよゝざねどもすし
もめあゝん人のみゝふもめもとまる
あとちあんよ地ほうゝ。さほよゝふハ。
まんれをちゝまうゝくさるまゝゝ中
の如ぬくゝふ。なゝばすゝてうゝすゝあさ
る。あれうゝてこのうゝれ半をやうなう
まゝうゝばと見ゆう。ちゝよハさゝも
ゆもハざゝめゝどゝれのゝゝゝくゝさ
てゝよよくゝちゝおされゝどゝゝとゝゝびゝ
ゝゝう。あゝれ中ゝもゝれる

真字 半 過 人 音 讀 上等人 向ニ知 達 習 学 耳 目 留 自然 字 剛々 會節 禁中ノ儀式 五月節 朝 根 一トホリナラヌ 宴 先 難 暇 今ハ 九月重陽 取 纏 故事 初 ヨウラシイ 人ニ 返可 イカバシイ 情 ニアラウ 然 ワザトガマシイ ツマラヌ

まゝうゝ。ゝ。ゝ。

ひとあくふあそぜざるあ〜でもおのづら
（テマドリ）
ぐふほよおもへバをもしろくとおもれる。
（ナルホド）（ミジカシ）（カガヘバ）（オモシロク）
あべうりけることれ枝のをわるつるあく。
（ヒッカナッカハズズ）
めふもうあもぬ〜ぬあどをぬ〜ぬ推量
（留）（今ト）（今モ）
よこと出うる。あうくふ俊まてくんゆよ
（詠）（カヘッテ）
ろびのことよなどうハ。はてもとおぼゆる
（ムヒカシ）
をわうう〜ろ〜ぬぐ〜ぬひ見ぬだうれ
（今）（分）（ホド）
んうよてよ〜ぐみなさけぐざ〜ん
（アザヤカ）（ナサケシリガホヲヒザラン）
あんぬやふうぐさ。すぐくんふれん
（ミグルシカルマイ）（知有）
事をもぬ。ぬ〜ぐ〜ふもてあ〜ぬをま
（イヒ）
ほ〜うんるをもぬひうふうのぬ〜ハ
（ヒ）（ニ）

毛日の綿れ泊をている文あり
えあ〜ぬ稲をゝ引け
玉 菖蒲の根れをゝ引ける
分をよみ物とするゝ引けとハ
あやあれ根の綿の泊ゆくいる文
釈 拾きふえあ〜ぬふ泊をみる
やゝまいれるハもあ〜人ゝの業ふ
えあ〜ぬハえさ〜ぬ俵ふあじう
ぬ〜根あ〜ぬ〜〜えさ〜ぬハ得
去ぬふてのがきゝ〜ゝれさて
まゝうゝれ弾のんを 玉 〜ゝれゝとハ
まべて泊をうる物むつ〜きわぎ
と〜ていいるゝ新れとれるれうあり
いゝふあれをうふ
釈 ゝひ物ゝ〜じていゝふあれをうゝ
物のあをゝ〜ゝちゝ〜せ
拾 菓のあをゝをゝの物水部ふよせ
てあるゝ〜ゝをゝゝちゝ〜せゝと文
ゝ 釈 ゝゝちハ物ゝ託ていかさゝ
つきゝれゝゝあゝふあゝせ
拾 あゝせハうれあふあゝすゝゝ
ゝ同ゝ〜ゝ 玉 あゝをのゝさ拾まあ
ゝ〜 俵ゝゝよゝあつあいめふあゝ
をゝるゝゝいつゝゝさゝてゝれ肯
のせゝちゝゝ〜九りれゝんゝゝ〜を

食をゝくいゝゝゝゝていゝれ毛日ゼんゝとするをゝりかゝれ泊を束ずるをゝりあゝとまて他人ゝんゝちゝ〜〜ゝ〜れふれ
ゝ似つゝぬいゝとあゝゝををきゝすゝあゝりいゝゝあゝゝハ長ゝあをを束ずるをいゝ
さあ〜〜でもおのづゝ〜 玉 ゝさあ〜〜でもゝハゝのゝ〜ゝゝゝ日あゝ〜ゝゝゝゝ日あゝゝ菖蒲の根ハ八日茅のあハ九日ゝゝの時ゝゝまゝ人あ
おこせてゝゝゝゝもゝゝゝゝ

すぐしてくあんあべうりそるなどいはゆも。（馬頭カ）
君を人ひとりの住さ海をんのうちか
源氏
おもひつぐはふかまてて出てしぐやる
（世三仆ぐ女ル中三）足
さしまぐしる事おく抑ひそるる。
過
とありぐるさよもいとぐむ夜さぐ新。
ヒトシホ
いげうるんにより竟ともあるてぞてく
何方
はあやしにまどもふあるてぞうしまひつ』
ハヤ モナイ　イ海　依　竟　成　金ラ

（釈）これとい茂つぐしぐ〜　（釈）これとい茂つぐの言をさしていへりさ〜ぐさるるおく抑ーまはいるふよ〜ぐてのうちの事情ひぐ海をうめくいるこ所ふ情ふこれとい今こ所の海ふうろーとしこ新ふところをさしていまとこまぐよとあるおをやまされるやうふいされるハいみぐ見ひぐことしこひつぐけるやとい心海うてえ新のこ所の海をこれぐよといいぐういふだきこうの抑ーこひるる事こい詞も上ふかる詞おくく仏人の抑さとも中こぐさるやや

ありぐさるもいとぐむまふこぐる

（釈）ありぐさるハ茂盗のぐと見人の世よあうぐさるハ物ふまぐうハ中おこうこ〜おぐ茂つぐめるとまこ〜せこうこぐ茂いとここ〜ぐあり相盗者の中名北称をこふ心の塞こ茂ふいこ〜ぐ事あるこ海ふひぐこ〜せおくこいとぐハこ〜もむふのあぐぐふかるこ人のあうぐこ見をこふひいぐ〜いとぐふぐぐるこいこ茂をつぐ〜

いぐ〜こふうりまつともおく〜こ

（釈）ふこ〜の海ふちちくおうこ〜ふぐ〜ふ仏の方ふうて立まう海ふるこもおくそてこ〜ハ相もあ見ふぐぐもふおうくこ〜新をあく〜ふひつこいふこ〜ふ〜ふ〜ふ

おわりこのそうし　釈　そうしは葵の上の侍ひとりなり　鍛冶のそうし　紀ありし人のけそひは葵上のそうしひさこれるそうしは乱雑ふるひぶるるすべ

おのへ　れたてぐくとう　出

釈　正宗　よりふひくくまのまめやうかなりあるひのきあくうぶ　そつひのさけを　紀ふひおべうりくるあどいひしるすべ　評　この和正宗のは　はすをとりかるる第一段なり　脇を　なるる　まつ　紀をつくへ

あるうるるし　紀　釈　うるし　きは側の端正なる　なりとぐりげは　ふるうのさねをしては方ふ　紀りしき

さこあり

中納言の君中務　花　中納言の君は源氏方源大へうろひのをり一夜　えとまろるる人と中つさの君は　結ふ　ふ　ふ　

いれてぞ（入）ぐしたりける（薩）ぞふ侍る。と申す。（源氏付）いとよう
なん。あやまりきこえたう（牛）ぶらひきいま
つべくん所をとの給ふ。（地）ものびくれはる（方）
ぎりへどこ（違）ろもあるまじうぬ（数多）ぬ。
ぬ（違）ぬ（他）ぬ（違）ぬ（守）ぬ（退）ぬ（慎）ぬ（殺）ぬ（無礼氣）
ぬ（紀伊守）ぬ（伊与）ぬ（ヒソカニ）

なるべくを笑ひひく。（源氏）その人ぢうかうんあん
うれしくるべき。女どもはたびよ（旅寝）ハおおそろ
しくんちきべたをぞ（女房）その九帳れうし（侍従）
ぬ。とのうへだ（公達ヤ上ヲ意ス）ぞふよろしくおもし（御座）所ふ。
とて人もたらせやれ（紀守ノ家ヘ）いとものびくあと
さらにこと（源氏）ぐしうぬ所をといそだ出
たへぞ（左大臣）ぬもやそたいぶ。ぬこともよ
むつまし（睦）ぬぞうして。おそ。まぬ。
かみふそ（紀守）ぬとうぶれど。（メイワクガレド）人もきこいまぞ。
ちんでん（殿）のひんぐ（東）ぬもてもひあけさせ（面）（拂）（明）
てりそあれ（ヤリ水）ぬの松

ぞ（釈）うげハ桂ぬ
いとあるあり（録）いとくあるあり
るかぐとむのでとくとあるとうと
いかぬあり
牛おぐうり入べうん（湖）下集ぞあ
ん。れぬもあくん安ぞ。ぬをとと
思びくのぬうとくぐぬハ（釈）源氏の
くうひうえ女の系あどぬあとあり
べーといあさて
うさふぞげて（釈）ヨぞと方の寒う
さう日ふまくり引ぞ（紀）ぞるべあれ
あるあうふ寒上ぞうたるれぞうぬ
さんいとりきこふ日ふ紀伊ちう
ぞ方へさくへのあるべーく詠ぬく
うけあうりあぞうあどたて
いとのくれぬた（釈）作を詠うあうふ次ぞく退きて
伊勢ぞくぬを守とハいぞ紀（釈）紀伊ちの父
通してさおいへとくぞ父子ぞを別ぞ
てきありしきまくてもむうこれも
方通ぞどの抱きうあるべー
母どかれるびよハ（釈）或抱ふ源氏のぎ
ぞふあうーたおうー和ものとて
（釈）細流ふ侍ふ人さちの手ねんとある

まつ一人たちてもとゆかんものの
そうらはせるく弁花紀伊守が母と
あるをおぼえられさふらふ
釈 とのゝ下ぶでゆをねがはするゆや
うゝゆうゝあとゆかれどう
釈 紀伊ちかく侍ふ者ゆえとて
ものゝこゝ侍ふ人ゆ供の人おもき
ゆゝてゝおゝてゆくさて
ちんでんのおもてゝ 釈 寝殿を
正殿と今は書院のごとしその東面を
ちゝゆゝあげさせて源氏ゆゆ社とた
つらつゝ侍ふ紀ちの侍ふものゆ
持くちゝさゝまゝといへよゝ
そこちゝとゆゝ花ゆゆ
蛍 ゝゝゝとゆゝ花とゆる 釈 ちゝ虫
のゆくにゆゝゆゝ夜の香ゆゝ入てゝゝ
侍ふゆゆ花ゆゆゆゝゝゝゝゝ
とゆゝ花とゆる 釈 ゆゝ
ゝゝ侍ふゆゝゝ 玉 波風の下
をとゝゆゝて夜へ流ゆゆる泉
あゝゝゆゝゝゝゝゝゝ
餘 風 侍ふ海ふ引る八吉井とゆ
ゝゝゝゝ今井ふつゝゝふあゝ
井ゝゝゝ花ゆゝゝゝゝゝ

だゝ人などゝ。ゆゝるゝにをゝゝゝ志ゆゝゝ。
オモシロウ 為成
みゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝ載などゝゝゝ
田舎 メク ワザトウヒシクタ仕マス ウヱゴミ キ
ゝゝゝゝゝゝ

いひをそひあどもろさこ抽ひをそのふ
ことあ紀ハおちさく家ハ衍へ
さくしのろみあう 釈障子の紙のう
ふ牧教ふとあろいうぐ尖伊礼
あう傳ふの紙ようのろ ふつけく
ぜのろされ見やとあぐせど傳ふ尽
ま を 拾 教ふく徒の抽徒ふま礼
ひはやうしとろく系もあり徐そう
とらふそうあろう
めや 拾 母屋とかハ母ふ家ふあ
らぜおやの上略ふうそくあの徒を
かとてさまくの屋やさどのひき
あどのやろハあうされふ伝ふれハ
さておう伝とハつけうあぐしく
もぐいとのくのまかうのく見ふく
細 表玉密通でうと 評 そのうとう
茂づのはうをうあそくれさう例
のめぐくしハそくの玉抽衍をあしし
おくうふくしのたかくぐし
武紋てのうされ源茂ふれ
新 此年既ようしをうふ物て出出
ようふ文ハうくまぐふみ茂のうと
釈 教茂年のあふ引しそのつゆと
きくれぬ教ぐハのきくんしそうとハ
世年のわれのあるべし 評 教ふそ

なるべしぃいとうそうまあぐもてぃまぐ紀は
やんぃとうるぬよすぐぃけぐまり絡へるそう
さそうぐ（モノサビシ）しうめれぃされどけるぐ紀くは
ハぃよくくそてかくまあうきまのふあれぃなぐく
いふまのもぃおぐすうのくんようう絡へ
まぐばぃまぐむひけぐまくぃかやうのついで
うもぃ人のいひもうきんを受つけくうん
時ぃあどわぐん絡ふぃとあう年なくれぐ。
きくさう絡ひつぃ式絡ふうの推茂ぃよ。教
ぐか世まてまうわ絡ひうぐおどをすこ
しわうゆぐめてかくるもきくるぃくりぐ紀

○四十六

きまくぐくく教ふの推茂をくての
紀年ようのうう歩てくハかう
くあくんとんくようぐのせ伝
てまくくのくをあうはて伝線とせ
らまくう絡いくめぐしくの紀教ぐし
やうぐめて 玉 あうのくくハいうぐ受
えぐれどもぐむくとうそかのぐ教
を印くてもあくく渡すぐくよ伝
くあう 評 式渡いくめぐしを年の
保判ぐくくまくハふハあぬ教く
ぐもぐくちう 釈 もぐく誦ふて
くぐふ打ぐずるくうくんずんじとま
やくハ音便くさてくれハうもぐくげ
あくまくをいふく
程くもくうハもあんう 釈 みもくう
ハぐくうくるくてハ茂くをくかくぐま
くくるきあふハぐれどあひくてハ教茂
ふくくくく程ハ文教ふの茂あれどがリ
とうあくきくのあわくく抽伝くふとうし
ぐぐ教ぐくあうれう 釈 伝寄出
ありてくくくくて出絡をかをふうて
菓子ぐくうくひふあくく
とぐう悔もいうよ 河 信てる楽呂我
遠可いうくんハくぐう悔をもう絡くう
を大思きまのせむくよせんみまくる

○さうさぎ

きまくぐくく教ふの推茂をくての
紀年ようのうう歩てくハかう
くあくんとんくようぐのせ伝
てまくくのくをあうはて伝線とせ
らまくう絡いくめぐしくの紀教ぐし
やうぐめて 玉 あうのくくハいうぐ受
えぐれどもぐむくとうそかのぐ教
を印くてもあくく渡すぐくよ伝
くあう 評 式渡いくめぐしを年の
保判ぐくくまくハふハあぬ教く
ぐもぐくちう 釈 もぐく誦ふて
くぐふ打ぐずるくうくんずんじとま
やくハ音便くさてくれハうもぐくげ
あくまくをいふく
程くもくうハもあんう 釈 みもくう
ハぐくうくるくてハ茂くをくかくぐま
くくるきあふハぐれどあひくてハ教茂
ふくくくく程ハ文教ふの茂あれどがリ
とうあくきくのあわくく抽伝くふとうし
ぐぐ教ぐくあうれう 釈 伝寄出
ありてくくくくて出絡をかをふうて
菓子ぐくうくひふあくく
とぐう悔もいうよ 河 信てる楽呂我
遠可いうくんハくぐう悔をもう絡くう
を大思きまのせむくよせんみまくる

ぐ年くくうくぐぐかちふもあるうれ。（誦 可）
ん抽とうハ志ちんうくとあぐひ。かくいぐ（程 紀守）
きくくどうう燈 篭 ろうけそへ必あくくうげあど（明 挑 係 問）
しくて出ぐぐあのぐうあおまうぐぐう（菓 子）
悔もいうふそハけくうれんあとなくくは。（イ ム）
めぐあうぐれのぐぐあくんとの絡へぐちよよ（イカヾシ 紀守 紀守 亭主ブリ）
ぐんとうもえうけあハくぶとかくまうて（畏）
さぬくくふぐちつくれぬまくふうある（侍 端 方 假）
やうふてあれとのぐあまくぐくくもきれ（御 寝 御モ）
ようわぬあぐれ子どもをを紀げふてあう。（紀守 ウツクシケ）
わくそ童る。後よのほどよ出後ぐあれるも（分）

はゝ
ふよみんあきびさごをうかぜよ
えんまく 釈 上の風俗の歌恋歌催
る出をさう出るくさんにおやきみを
源氏まづ〳〵比てこゝ比りの女成
出さと歌まの大さうろこのうりと
あるてハとゝ出様ふさろくこのまゝ
もあまてうとゝ様ぶめてまろくふ
まうけのあ紀ちろかりかりとふと
あるぐ〳〵りもあくてふとあるか
まてこぐ紀ちもあてうろおれく
これもすてぐ〳〵
むまよろんともろく 王 さぐ僧ろ出
の羽出てそんろのこ出ていゆゆてく
作ゝんえ出ひうり作〳〵ぐとす出ろさ
うけまろ〳〵むハえ義様〳〵ちく紀
ろ〳〵つろれおこうふ 釈 あろ紀あろ
あぶ作屋の和出様よも出ちをまうけ
ろるあぐ〳〵下よおくあるもう〳〵ふ入
もあとあふれてと比てろ中出ちて
そこふろうそめふあて紀ちと様様
〳〵ろ中
あるぐのあどもそうげてあり
評 ろて出ろ〳〵げふ中ぐのるをふ中
ふふ出をあ〳〵り紀て様の用と
をゝれろうとゝろみく

あり。ようのきけれ子もけりあるこ様れ
中よいとゝそひあてそろまて十二三ばろり
伊与 夕 ヤウハウチアガリテ
あるもけ出いづまいいづまあどとひろふに。
紀時行 問
きまハ様様門のうみれきろのこうていと
空蟬父 赤 子
うれ作ゝくきろ作ゝうる銭をさあ紀ねどふやく
カハユウ 幼
まこ作ゝうる。あひなる人のようすぐにかくく
姉 空セミ 縁 コノ所ニ 父ニ
作るく。あひなる人のようすぐにかくく
オ
作るあり。さろんあどもつ紀作ゝうぬべくそう
ガクモン 異
ハ作ゝぬを及とあどもそひろへうけあぐゝ。
すぐくゝうハえまぐゝらひ作ゝぐあると
サワハリーハ ツキアヒ
まうにあきれのことやこのあねぐこゝや。
紀行 子ノ
槙 サマ人ノ
まうとの後おおやさあん作るとやきてる。
紀行 主人

母 設 帝
紀行 おおやきもようけゝこりゝろれう人
空セミヲ
似氣 よもきこゝめ〳〵おろて。あぐゝうへよいぐ〳〵
漏 奏
ろそんともしこゝせ〳〵をいろふありに
分 男女ノ縁ノコト
ろむとといつぐやの作ハきゝ。せここ作ぐあ
マオトセヨテメキ
なきりのあまこあどいとおろぐけのこまふ。
紀行 意 不
アンダワイニ
あいよかこて指〳〵作るなり。せ井とりあの
男女ノ縁
サウバカリ
さあくこと〳〵て。ろうとむ〳〵と作ぐまりゝる本
中 就 宿 世
作〳〵ふ〳〵ふ〳〵ても女のきてぐせハ。うろび
ミアハセ 浮
ろるあんあこ様ろ作ろのどゆろえさしよ
マウミアゲル 紀伊与 紀行 係行
のきけれ作〳〵ぐゝや。ろとろのゝんを。いぐ
ダイジニスル
夕
さてこれ作ゝとここハろひて作ろあるを。
私 主

人おぼえてくまぐまとうるさくかぞ
ゆくくらはさまをぐくうハサヾり
とらせさとらなとぐくしとるんがめ
まくくとのほのおや 餘 さ蘭さまう
とハ真人く紀ちをさして紀ちと
ものくまろう苦よるぐめのくらのハ
いさうあがむる強くもの人八年後と云
ぐのるく 釈 れのおやハ住母あり
おやのしふれくらやくをふくめて
上のやかどを結びうう
少げるにおやをもまうけうるれ
とらやさあり法住いぐまもこうう
上ものきくめおきてを 新 かる女の伝るふ出くそぐやとつまびれのくをさそ世
めり至ていろふぬるんとづくさくさくさくとろくくとろみるどの伝れ出何くう人よもすめおきてとうふ
まぐハ源氏のれくまふく
をくさてさぐあるにおれ 釈 くふせくあくハ例の男女れ方の世やく縁のるく次のせ年も同ど さて源
氏君ハぐさ十七業だうあるふくくるるのあるれよおとずけとらくく
あるるあくくを抑伝るあう 餘 更記皆皇本紀出不意 釈 くうるあくぐて伊子外ど妻まあるて伝くくとらふさく
中ふついて芸まぐせハうく 釈 まぐせハ宿世の字まゆてくの前世の右縁のるあると身の幸不幸のるの小物て
ひう男芸の縁といあれハ芸ようるるまで定うくるれおきあ小女ハ様よ男よちさぐびふえあ一ぬ抑ある
ゆ身の上もあのれとにあがくくうるびくるのひくるるぶあれおうとらふ芸と
君をとおうーん 拾 大和物語まを女院の小方れちぐ神の左物云れやていまにうくるをうよ子仲ぐらくて
世それくるるるの物ふみどうふくるまひづくうこぐ君ぐふとまのむどううぐ 釈 この段ハ数伝く伊子外ハ生老くれバ
まくるる年除をうづくくて君のてくくあるんとおまくてのるやく物ハ問うげうう解
いうぐハ 餘 これをうぐあるんとうまうふ解さんハ源ありいうぐうのるふて君とおるハざーんやとうくるくく

すぐくくくくとぐ。あるぐくよりさじめて
妙色 絵 拙者 添付
うけひきぐ伝くぐなんとやさて。さりとも
兼 引 ハ六 サウアリトモ
まうとくくちの。ぐさくくくいあめるくく
キサマ ニツカハシク 當世フウ
らんよ。おろくくてんやハかの。さけハいさく
下 立 伊子ノ

○とくき本

とくくくのるう 細 ものくくくとらくくんハ源氏のはあ少ハ様あるるよ私のといるるおりくく 餘 出伝
ハ物あるう物意ものくくくくのよりあるるくくくく

ものけのくるしう　圖これ光源氏の
詞ことにくはしくひていふ物の
けのりしんとうにくさそもろくと
いろくなるもくのなるめりとそ物
形しんあくらのまくく
ゆくるあるのそうしさ　釈ものそう
しさいはそらしさをさのうき
とうるのの物てをそうさぶ今もあ
るものく　評ふ陸と出来るの間答
ハケ物のくるきをいてまである
物くくケ物ケ物の源氏君を侍
じくるおのうたをあうしおきて
をすくる附のさの此ふるあしぬ
やうにせしものあるべし
ちじけるた　釈源くうて物くく
あふもしけるきくけとうるをの
ちどけるたふ物ふしぬ
いめうと　新婦ようも男の方ま身
していかのとうの後ハ仁賢紀の昆鷹
吉士が妻の歌ていくるま於妹背兄於
記亦兄弟草玉是人何怪矣云古注
云云古者不言兄弟長幼女必留称
兄男以女称妹云云とはさて此文の
比ハ物ざる称のおりてやくるる
ざくく

ひさくるぞ　釈上よりもうくるの
おくくくくるるくふて大とのご
かんばとあくくくる
くふ川入るくくるて　釈ようく
寝くるおのかへ影を川入くるく
神くくくるくるくも　玉或抄ふくる
とどくくくもくひけぬが神ふくく　釈
此侍のごくくくくくるるるふ我
うくをくくひけぬがあくたるたく
さくくどくくくくくくくくくくど
　細源氏のやはけをかて推
くのくく障子ハ寝殿と母屋との
南面と北面とのきを隔てる障子
ありまくくくくくハ源氏の南
面まるるふ殿とすくくくくくるふを
いつく今夜源氏の寝所ハ寝殿の
ふのいさくく去の祝はまんでんの東
おりてとあくくやはのくくハおも
てくおふ氏小のさくくどのあるく
くくくくくくくくくくくくくくハ
源氏のおりくくくおりてのくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
　中ねの
ものくくくくくくくくくくくくくく

られ給ハぬ。いとづくくくくくくくくくくくくくく

なるまでバあぎ(長押)のもと(下)へ(女房等)ふくていく(答)
まてあり。(女房たち)ちのやふ(イちりよ)ゆよりてぐいまふん。
と待る。(下屋)と(浴湯)いふ(下)ふれまづまりあるけ(寝)ひあれバ。
かげ(ムマウシ)ひをこころこふひさあげ(試)給へまで。
あるくよりハけぐ(彼方)ゆ(障子)ぐ(鎖)りまゐ帳をさうじ
ぐちよハ出て。ゆ(口)ちのごゝ記よゐんゆへバ。
うゝびつ(韓)ぐ(櫃)ハ(メノ)ぐ(中)ハあどめを(置)ゆ記れバ。ら(乱)ぐ(雑)り
ゆ(中)記なゝ成ゆ記けいりまひく。なゝ(サオト)ひ
しつる所ふいわゆへまバ。出で(唯)ひとり(一人)いと
さく(細)やゝ(小)ふるまてゝふゝ。なまわづゝ(ドウヤラコヽロヅカハシ)
くゝま(上)でゝ。うへ(衣)るまぬを打ゝ(ケル)やゝるまで。もと(夏)

中ハ(中将の君)ぬ打もひのぢ(験)ゝあるゝちゝて。
との(分別)ふを。ゝとゝうを見ひ見れぢ。ゆよ
おゝるゝんちゝて。やと(オヒエタル声ヘ)打びゆまで。
(驚)かほふきぬ(衣)のさゝわゝく(障)おゝふも(音)ゝそび。(係り)
(顔)ちゝけふゝふゝらぬ心のわどゝ月のゝん。(ツジニ)
おゝゝもゆれど。年ごゝ見ひゝるゝ月
(モットモ)うちも。ゆえゝちゝきんゝてなんかゝをゝう
をもゝいぐゝるゝも。ぱゝゝよゝるゝくハあゝじ。(念)
(待)と見ひあゝ給へ。いゝとやゝゝゝにあ給ひて。
おゝゝゝ(鬼)ゝ(神)ゝゝもあゝぐゝゝまゝぐ記ゝゝひなゝれぢ。(アラソフ)(ケスガキタ)(系)

ゆゆひゝゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝぢゝゝゝゝ(係り)人ゝれぬゝゝひの(験)ゆ中ハゝゝめゝつ
ゆ中ハを見ゝゝゝ見ゆ中ハゝゝめゝつ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なりくるのくらぬぶちもまさるび
しさくあるまでなりすとはまある身
まてはいるをすぐきふるまひとそ
よしあり
いきのしたり 湖 あくそびいあく
きくしとんうして 釈 このをくはは
うつくしくあられとるさまを清ずく
つるくきまのくるくるたまつけていと
あらまのまさうる情あり
ちくへべくもあるぬさし 湖 人さく金
ぐくもあくびまくふぐくをちくべ
まて来つる物をうひの外のもおが
めたるかとを 釈 おがめたるやがけて
ちくさとおがつくるくいつくしく
いとちひさやうあれば 釈 上よいとさて
やうまてふくくりとある意
さくくびのりとよ 釈 上よさくしびぐち
くあくくしれ
かくくつる中おがらく人 湖 ぐらぬ
中おをたちりのりひなし
やくくとのさまあり 餘 やくくをを
湖やもいへどくはさふあくびひひみ
あくくきあひくればやくくなりぐく
ぬたるのるさまをとたるくるく
いらくくるひくちくくる

たくくかれくさくくよくくしくくく

そのんことさへ。死ぬだろうわわるいよ。
なぐるまであせ汗ふりくいとなやま
げかる。流（ことばの）
そうで取出ふことのそよりほうんあそ
ちるだろホドけなさけくしんのひつく盡
さべるめれど。ヤハリおいとたさまつたようつて現
ともおだくぞこそ。思ヒ侍レ
おぼくぞこそれんのほども。いうぐ下
あさくはひまへざくんいとうやる形る
きそ。分際ぎとそそ侍るなれそかおし
生ちまくるをふくあさけなくらあ。情

ことばいわるさ侍も。ぞふいとほくくそろ
さづくくを。流河をそひあきバ。そのきそぐ際々
まぐそひもくぬくひごとぞや。中く初事
あべくるつくよそひなくまくるなんこうそて
ありくの用けえざく
おのづくらやまぶやくもあんそく
（世評ニ）実
（思ヒモノ）などまあめぐちてよろ
づよの侍へどいとくのぐくひあれはあるさ類源
のいよくうちとけやえんことるびく
ツラクハツカシ

思ひとまべく夫あくるのをきくとよ
ちふいとれる注ハきハとふ河の侍
ぬさぐろくふ天侍ぞにふ際
ハそのか際まれ是ある源のあるね
よ侍るえとふをそく
おくとちるくるを　釈おく八押つふ
ぬさるさくるつハんをそてをれぬ
さるて。要紀ぎするとふるうし
ちるぐうくさ　釈女のまぐうぬ
よつけくうんよ神くさて
そのきハぐくをちぐちくぬそく
釈きくくきそとてそけるあれくふ
をくけてかく分際おくのをもそさ
ちくぬ。ヤハリ事でとのるふくさ。ヤハリ
くきくハ他くうくふくあくまぢ
ある神ある是通のこぬくのあく
ふくいあはぐくそあくとふきさて
中くことハへる旧説のぐくくうてハ
ありくの用けえざく
おのづくらやまぶやくもあんそく
釈世の浮をも自然さくることもあ
んそハさくふあのぐちるぬもハ
ハくまでちくひちくぬを拾ぎき
お母のちあ源ありてこやそくあて
うくあのぐちあるぐさするあるバ

かくあるわ〳〵もぐてとろうと
とおぼゆるものいまどひをあぐ
あすゝにまぐふおぐせといふさと
さるべきこゝや　玉かやうふゆゝをいと
てあるまゝにあるまゝいをゝ仏るも
ゆるべきおもの事あるふやとこ
あらわゝれ　玉光やゝれと
いとさびしあるにあるうゑのゝく
釈せゝふ鄙いあるに伊勢のゆるさか
あるふ神〳〵ひて〳〵ゝ往ひなん
るのらびゝゝれバとこ
さるゝこの　湖情の方ゝいあひな
きのよあるゝこさんとゝ情の
おりゝく
ゝゝのゝゝあるゝ所のゝこゝちして
釈ゝ情のゝゝゝのやゝゝあるゝ
ちひくゝゝるゝゝをゝゝくゝれゝまれ
往いゝゝとゝゝひてゝゝゝゝまゝゝぶゝれ
ゝゝゝゝ

文武の妻と定まるこれ分限と
あり〜あがくこの身まで　奥入　河
とうつゝにおもひもかけぬ身とも
あり〜あがくこの身とも
歌　此ふ伝ふ歌さる私と思ふ所ろ
されと所〜よけ所のこゝろけら
あおきこゝろ〜ろ〜と六帖あ〜ふ
しら今あなふあ〜せ〜あるべ〜
あるまじ所ふ〜ろ
釈　あるまでさるあがくも所ぞた
のこそといふこゝろこゝろの〜体言と
ろあり〜あ〜のちせりそこゝろ〜
范　かとのあ身あ〜源氏ふとこれ
らばこゝろ〜ふ〜ふろ〜ありともこ
あ〜〜のふやとも形ひべさふこと
ふ所ふのこゝ後せハ氏のちといろん
こあり　釈　ふ当伝ふ後を後の
時とこゝんがとしぜハこれ
きせふじいふせ〜
うりあるこゝろものあ〜を
玉　ふハ夫のあ身あ身ハ一こゝひと逢
ひ身ふ〜ふ〜ふ〜ふれ〜ハこゝひ〜
ふ〜ふ〜一後を身ふ〜ハこゝろ
そあれうこゝろ所こゝ所ふ〜所後
のん始後ふ〜ふ〜

うけてぞとておもふるさ海ぞふいとことを
なみ。おろふあ〜ぞ身ふうなぐきあ後ふ
事ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
きいで〜。いとい〜ぞこゝろ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ひ所ふ出ふ。ふどいふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
女ふどの出ふ出ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ぐせふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ついであ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ハいふで〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
いとふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ふ〜ふの中ふもいで〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜

さぐひあ〜ふ〜ひふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
釈　さぐひあ〜ふひふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜

伊勢のいとさくみく
ゆくるさま　湖　文体のゆたかなる面あり　釈　業平のゆくるさすがにうるはしくやわらかなるやうにてゆくるさま
ことごとうありとい地よりふ様のいをばしくるあり
ありあるべし受りあぐさめあり　新　此ホ打とけるる筆をバ略して物語の姿をもて又是て情いよく女ハ心
あぐさあぐさるるどようの間はいひあぐさめあり　評　突くもあり　釈　業平ハ物語のめりてあまぎこまーふハあるあ
業つきいとくめぐ〜〜話ふこをこの実ふれ所を宮ふ〜れるこ
すでよ実すえこ〜〜といそれこるもまこ持ぐ〜〜さるハあ
をるあれてはゆるふ見きこあるけをとあるきあ〜も面ふの様ふ文とそふるるねとあ〜ぐ〜も業の様あれてゆるえ
さまびありされこさがりああぐりく業〜くいさんハ中〜ふおまだ〜ハ〜るる様めあるべ〜れバ〜ぐ大
くふ見ふ見ぐくあん実あ〜あ〜といとまてる四段ハいと〜ひぐ〜しくさてぐまこ〜てもこふて様とけ〜さる様
あるこ〜ハ様あ〜

とるもあをぬ人〜ふきいぐ〜こ〜　評　をあ手よ様の人〜あれ出てあのいかるねとるが様くきこをどと〜これくのるを
様こてつさせあこ〜みをおしとぐて五ゆあ人様情をふ人あこる
さ〜こ〜こ人ハいぐでうふふこふぐもゆこ〜業のいとこうあれをとあれをとるむべ〜業のこうあれをとハ思ひこるゆあれバ
さていこぐでうゆ文あぐもゆさんどよみきりて業のいとこうあれ出てあのいかるねとるが様くきこをどと〜これくのるを
いと様りあくあつりきこを玉様ふいぐでうのてよ様りて様ふ様ふ様ふ

ぜとそひあるいとのうちよりこ思
ひやうれて（伊与みし）ふやうんやうんとそうもおそろ
しくつまま

（宇治）
月のうさをあぐくよあうでけるる秋を
とうきもてぐ（アキタラデ）ゐもなるまこるこ（事）ふく、
（取雑）
あうくなるまバ。（障子）ぐちまでおろうふ。
（明）
うちもとも。（口）人さるぐ（送）れバひさて
（内）（外）
くわまこ入ぬどんぼそくぐうる
（別）（障子ヲ）
せたとんて。（直衣）さもはあり。おどき（着）ぬひて。
（関）
南のこうらんよまぐ（横）うちたのぐん
（匂）（ヨリテ）（前栽ヲ）
ふぐ。（西）ゆもてのかう（格子）てたあげく。
（面）（イソギ）（上）

（釈）南の簀子の西の方ふとわたの中よりかたをとりてうるこさうーのうみすの
（釈）旧注のぐく小障子の上ようあるべー小障子紙ちうとそれさる説どもハ物ちうぐ
才すーむさうそくるすをん
（釈）源氏をのぐたてのうたんもううるぐ房どものすきうこハ才すーむたとめてくぐそうるべーとく
月ハるかうてうく
（釈）八月のおのうのぐうるべし光をさされハ物をて光のうすくおうくうぐうさうふて物ハ物ちうぐ
これを地ふうくうる新ハ物ちうぐ
まてる旧注ハさくびんぐなれもやうも記説どもあわーあうくをうーさハ夜中よりも部てうーさのおりーうきようく
（評）伝の言もあたるのうーきもたまくのふこ憂あれバうるーく数あれバおりーうくをあけくおりうあうくおて

（釈）源氏の

くまおく人あり。ふいうく人馬数多く
評此段要文を引かるる後の事なれ
ども文のあらましをしるすべく
このかぐハ左ごのこと 評ちぐあり
まハ物を定めふかく紀守とるべ
よさまうよう
中納言のかハ 花 おこゝハおん智と云
てゝハ中納言といふ官名
右衛門督とうしるく
うへあもられぬん 風 ちぐ左ま
どもをぐくうそひえぬう紀
寺のナしあるう
のまひんん 釈 これハあるとと
あれど源氏ふの行を伝ふるかのこ
まいといへる
むはつあれてあれぜど 評 この詞と
ふくかさかられさう
郎兵のおとうとやらう
細 芳ふまうとあり。数く考証
しこの詞く紀守をさしてのるべく
示隆の後ふまのあるあれとを
称ふあり示隆のふあハ紀守
別後の妻あるべ
かくて物一位ものと
あるて三ヶ年く 孟 伊与ら妻ふ

てもとみるよりまどろまれぬハぶ。又あひうる
べきなる紀をまもりてうれ人のそのうむ
んのうち成。いうゐんとんぐるくもげし
やる。すぐまてるとハなうれど。ゑんやとてく
めてつみてもありつる中のまおうれ。ぶまよ
なくん。つのつあるくのいひしことハ。ぞよ
とあぶ。あをせれうり。このほどハ
おハ後ふのあるれもまれなハいとうさ
出もうんん中のぶとぐく法ふ
かくぐるくおぼうとびてきのうみ
をめしうう。かのあわし中納言のふハ。ふう

おやのきとうとうとと
細 示隆の父ハあ仕ことをぶ
まさもあくて文仏のまてあるす
んやうぬとと
あうれのすやうく 釈 あうれくハ
父のまきてまぶひるるあうれあ
うくようくまくハうちの
うくうハ行ぐるべく 玉 をべて
うくあくぶとうハうくあく
ぎといふさうとうあさとと
へうハぐうり 司 行ぐるべくの詞面
ゆし次の詞ようとくくきといる
ぞ庵をうけうく
世のくくひまて 花 まてあハま
母ふむづぬるとと世のさてふ中
もあり 釈 つまもてうまく
うとくくくく行まハ世まるいひる
ちうぐくくもくきみてむま
くもせるハようもあ行ぐもとふ
さと旨注ふ白氏文集をりまてる
までハあぐるふ小枝ようれうち
ぐごと
あてちあまう 釈 紀ちの平てく
てまやうたうく 釈 いづともうたに

○ちうきす

させてんや。からうげよんそうを才ぢく
たうふ人ふまきん。うへふとわまきまんとのく
まんぐいとううこと紀ちあ行ぐふ行ちなう。
あひまある人よのひうんとやとをおね
つぶれておぼせどうれあり君ハあをんの
おとうとやあるさと行ぐぶこあぬさ
とせぐうりぐ。かくて物一行まぐ。おやれた
きてよ半とぐ人ふとうひあぐ紀てんあうぬ
やうにあん少ふうる。あを行のことや。
ろうく少くく人ぐう。よとふようや。
とのぶへぐ。行ぐうハ行ぐぐるぐ。ゆて

離 ちるのまてくうとくくうう待まばのさと
ひとてむつま聴待ばとまうさておこの
ありてこのカノ小君奉のみくちのおまてつこまやうに
をうーとはあるまでどなるめれるさ海ナヤカナル
してあてでくとえんうう。めいれていと源氏
なうつうくかうひ行ふ童ふごちに。
いとめでくうまてとおもふいめうとれ空セミ
君の手もくうくとひやうふさるべれ委然
手もいへやあどーてちばうげま答
ちづまうればうちいでみつーさまど空ノコラ
いとよくいひちーせ行ふかるとこと小君ウ

離 ちるのまてくうとくくうう待まばのさと
ひとてむつま聴待ばとまうさておこの
ありてこのカノ小君奉のみくちのおまてつこまやうに
をうーとはあるまでどなるめれるさ海ナヤカナル
してあてでくとえんうう。めいれていと源氏
なうつうくかうひ行ふ童ふごちに。
いとめでくうまてとおもふいめうとれ空セミ
君の手もくうくとひやうふさるべれ委然
手もいへやあどーてちばうげま答
ちづまうればうちいでみつーさまど空ノコラ
いとよくいひちーせ行ふかるとこと小君ウ

なうてはあるとあるとあると

君のごくあるすべれさるに方よ
ふくふをられまることハ心ゆかぬ
をぐせのそへる
きのうみすれんえ云〳〵
釈 紀守主死さるんよ宇佐の年
老そて伊予女の妻ふあれることを
あさ〳〵のふをひくんをそりて
退返してをづれよ〳〵とやよ女よ
小君をりてうづれてひきあそあ
くとこ今らも源氏の北方へ紀ちが
手ずあくさ後し 評 紀ちが小君をも
あそやふつけく注母ふををうけ
さうをを流出てつひよけるふよう
てを恨の尼ふあるべさけ出ら
らまさらいとのぞ〳〵しかるこのど
もをべて出家法のはられハふを注
物あひふまゝきあり云〳〵
釈 源氏の小君をやひのうよ小君を
源氏を忘ひ年ぶと悲しうを注ま
る女郎といつり物ハられうされ
よおをよべきなあり〳〵をさも色
とう〳〵みのひ〳〵ふあるをあ世て
物とハいくるこさそこの小君のさみを
ふふよ男色をかのあり〳〵て出〳〵る
りのとおぶそ〳〵ふあまあれるさ

翌 まさの日小君をめ〳〵られバ
かへりこと 乞 ふかるにふみ見るべきこんもあり。
とゆそ云 宇佐河 よとのの〳〵へで。小君 うち思こて。河 出ぎ ぐふ
ぬ〳〵もの紅ハざり〳〵ねをいりぐハさハ中
さん。といふよん 宇佐 やまく。のこうあくの 小君二
まりをきを イまひ てくりと。ふこふ
うぎうり明〳〵。河 いでおよびけ イヤサ セタ ることハ
いそぬぞよれ。さハまのあり紅ひそとむつ
ぐ〳〵まて。ふ河 シカラバ 莫 参 ハラ
ぬ。さのうみ 召 ムマキラギフ ておあり
タテラレ 紀 守 好色 継 母 追 キ
さすをを。あ〳〵れのよおひてつる
可惜

まりて云〳〵とう紀出りををでめて
こふかくいひまいうてはうこう
よふせうりう云〳〵ふれあ紀人よりう
ゆ〳〵あれまあがさるといひ宇佐
出ふいうてをさぐりのあをちひ
さ紀わどあどいつるまさ〳〵くあの
ア云ねをあ〳〵ハされる姫つ紀こ
んをつけてよりむべ〜注るを注紅
ふいさてうもをさぐまあ紀ハ年ぐう
のをこぶ神さあもあもあとい
あかざりあるすといふべ〜
いふりひおのこゆあさ〳〵とく
釈 いありひおハ小君あさ〳〵ハ宇佐
のりようけてんべ〜
あこハもゝじみ 新 吾子〜万葉
あどふ吾をあ。もも。ともいつり
さてあこいとグ子といひてあさ〳〵こ
の注あり 釈 汝ハるまどられと伊
与かよりハおふをてるでと敬き
よのりふ
くびかそ〳〵そ 釈 業よは注ハを
世の俗注ふて頸の細きハ公ふおあり
あどいふ諺れあり三注ふたいう
れるのりげあ紀とハいるあるべし
あるうある 国 太つうとふりふて

従 ゲンヨリ トリ 寄 うづ〳〵よるいのれバこのふをめく 小君 タイク
うづさて セツニシテ みてあり。 テ ツレ 小君ヲ 〳〵よせて。
きのふまち 昨日 待 暮 〳〵をなふあひふ
まど紀なふんりとるんど 怨 小君 参ラウカリ 参ラウソリ
あ〳〵めくみりいぢ とのりふよ居ぐ 顔 カヤウく ドウジヤ
とまりふ 赤 ふりひなのこゆやりさま 係詞 キヨウサメタイ
とく。まるもをへり。あこ 御フミヲ 吾子 係詞
いよれおされよりそ 翁 伊豫 已前 源 ぐ。
ちまど半のりぞなくびやて 細 頸
とて。ふつ フトリスギタ 後 見 なるうう注こまうう
かくあるばりりふおめりさりとれあこも 義ヲ 吾子

あのふるくさまなるさこそほげ
もきんそといふハ法を持じる
さこそてこそハうのそで
ゆくさをこそうるん
湖 年老たる人あまたバ
まつそこのひく 釈 あの源氏
そくをさこそいそむまーくするを
おろいしといふ
うちふも 釈 上ようちふもこま
きんとあるーひびさこ
みこげどの 河 御匣殿内蔵寮
外御服あど裁縫所之順徳院御抄
釈 今世よお御ア御ア御ア御ア
貞観殿中ふあるとんこうくれどこハ
ヨどとあれバ源氏そのはくげ反へ
低江人葉よ庶人ふ家頂ぞふを
いそことんこう
うぐーしさあさこ 新 めくあま
じたるの ふたさをさのたまぞち
ヨ 釈 つこ人あどせるぐぐろたを副
とう源んのとこ 釈 四ふとう
をこ人ヨのとりづけてこんべーと
あふころ ゆ
いとつたあるべく 玉 ふたの妻と
宮まれる ヨ ふて 主 夫の源氏君ど

ヨどゑ
ゆくさ向来たみじ短りかりゆんとのたへバさめや
たりうん伊与夕いらじうりうることりれとおへる
を。源しーとおびた。このあをまりちー小君纏
ぶひく。内裡ふもあて率ふりおどーたふ。
わがみ御こげどの匣殿よのたひく。さこ装でく東
などもをさせ。ゆくこと実おや親ぞきてあり
うひまふ。ぞ空ハたをつよありされどこのこも宅ん小君
いとをきれーこころよりいろにちもせ落散
ばかりぐーたたさへとりて源ん月のおぼ
うをいとつたあるべく忘ぞめでこたる
ニアハシカラズ

へゆたよりあどせんハ似ーうーう
むこえうく
ヨりうここて 釈 ここひいりど
めでこたは年も ヨりの限お源
てこてよりれふふてこくハまま
ーとこひておとけしこゆてるも
はこそばといふさと四ふいここし
ヨのりーはこそひこさ侍へこく
釈 こたかてこさこあのこ
なこーとはいこく 玉 ぞふハ世中の
人のめでゆるもぞふ
をこーきさあを 釈 をこーたをこ
ぞーきこさあはこちく先お源の
つきあたをこひ法ようこちのこちき
を加さこ文はついでありこて物ケ
ヨとはいまぞハまよ地てヤ様の
ふをいひ法よ源氏ヨのふをいよう
ヨこーこたあどの 玉 源氏ヨを
まこーこをこけてもあるまぞたす
とみどくうたふふてこヨ様の
こヨ様のこーこここーく
こひまざれ 釈 こひハ動こて
ひこふあのこここさこぞれいりのふ
絵まこくゆくさこ
きいのここ 岷 あよ内ふのこさふ

まわぞ身こここて。ヨとこひくぐちとけこる
法いーこを学こぞ学のこあーはこを源ハ
なりこ法ハ帯になべくよやハとおりひ出
学こぬよはあーねどをこーたこ釈をんこ
ありてもなふくハあるべきぞどこひこ
こてありこりこ君ハ地げーおこる時乃息
まもなくぐんべこここもこ
いべ。ぞ空エもこーこここぞどのぐこりこ。
ここ釈こんこ彩くおぼーわるがづーし
はハラシャウモナクひこぞ
ここ空ヲカくこりこりここ
らん所ハシノビぐんこたふるまひやあここきん。フツガフナ行状露顕

らひあるべきことのいと
さるべきことのいと　釈或説ハ云
禁中より退出しまゐらせて方々
かくくるをゐひかうひくる仰うて
おそろしといてられ給ふ御ぶさ御を給ふ
まそうふ　玉ふりふかもしまし
しるのへ〜まう侍まろでうと
いるよあいまゆ〜て八忌の方を
さぐよまゆまゆ様を〜〜てこ
やりあめめのぐくと　玉源氏の
けあふもとらよゆもしまゆ〜も
ゑをゐのれてまで〜ゐ侍よ侍と
人のもしふようてあれバ又げなお
ちゆ〜〜るもしさら水の面目と
いるく　釈この今ゐ様の河のもを
玉史記項羽本紀続江東父兄憐而王我何面目見之
人げあゐ有ありまを　釈人氣ヒトゲ
とハくちのもとく人がもゆ〜ゐ
ようく
ゑの中ふてるすゆげきを
玉湖そ〜あの方遠の所ゆまゆ〜を
るをゆ〜ゆ〜　釈ゆ〜ゆ〜ゆ
いよく　ゆのまぐををあげくるの加
いるべゐれバとゆまを

とゆ〜ゆ〜ゆ空セミ
まゆのゆ内裏
ゆゐいれ方
ゆまゆ〜ゆ
ゆ〜ゆ紀守
とゆ〜こ長
よゆ〜ゆ如此
あゆ〜ゆ暮
もゆづめ一バシニ
あゆゐゆ
ゆゐ〜ゆ淺

まゆゐゐれバ　玉人げあゐ有ありまを成ゐんをなりて
て源氏ゐよ月ゐ中ゆ月ゐ〜ゆ
くをまゆゐゐ月ゐ〜ゐ月ゐのゆ〜
ゐゆ〜ゐれどいゐいをゐゐ
ゐゆまゆゐれバゐく　釈ゐゐ〜
いを〜ゐゆまゆゐ平條のゐゐゐ
ゆ〜ゐゆまゆゐれバゐくゐゐ
ゆゐハゐゐゐゐゐゐゐを人ゐ
いゐゐ〜ゐゐゐゐゐゐ
平條の河ゐゐゐゐゐゐ
所ゐあゐハゐゐゐ肩條ゐどゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐ〜ゐゐを月ゐゐゐゐ月ゐ局
ゆゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐれゐを知れバゐゐゐゐ
ゐゐゐゐれバゐゐゐゐゐゐ
かゐゐゐ　玉かゐれゐゐれゐれゐ
をいふゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
まゐゐゐゐれんゐあゐゐゐゐ
あるゐ後のゐゐゐのゐあゐを
いゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
除ゐゐゐゐ　釈ゐの流ゐゐ後の
流ハひがゐゐゐれハ仲ゐゐゐゐれ
邪ゐゐゐゐ
ゐゐゐゐ

ゐゐゐゐ人げゐ紀ありまゐ成ゐんをなりて
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐんゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐ

いとあさましく　釈 平保の女房れ
局よ迹へくるをそをふ兄長をさま
しくふさぬくつしハつまこのしのさと
ふまぬ　釈 ちとく泣もすき
わどくよいふく俗ふふぬどうとふさ
をさの兄人の　湖 幸さの母ぐち
まうの八世よ兄むるすどといひど
をくるあり
人くさげどおさ人させて
釈 病あれバ女房どもをさげず
胸腹あど押させて侍れバ侍あり
いくといふさくあやーとられもくい
泣りくあやーとそろんとい感
ちあさぐまうぬる男のおぐく
釈 受領の妻と平格のさうこう男
といふくおどえ八人のおのくふて
こくハ男の家ひ仕合せをいさ
すどうーおやのこく　釈 老里の
きふいおやのいらげとまうくうと
あるとよーく父母の餐ばのおもうげま
兄ややうあをとまれるといくる
ありいとありれある頃くあるさくハ
父母のあれをさしていくう
兄くくも　釈 さばうの源氏のい志
をたちちぬやくふ兄源つもとく

よこらけへくからくうどて半どりきてり。
小兄人　ヤウくノコデ　タヅネ　サグリアクリ　来
いとあさましくくはくくしくいふひ
ツ　ナシ　タミカヒ　中羽
なくとぼさんとなくきぬどうりいへばくく
湖ノ　泣　ホドニ
くくぬんハつくふものらをさなる兄人の。
フラナ　イセ　使　幼
かくくといひつくるハいみどくいむある
言　傳　忌
ものをとといひどくてんちあやはくれバ。
赫　ネ羽
人くくさけどおさくさせてくんとやさんさせよ。
湖ノ　避　押　マウシアゲヨ
あやくくと半きもくくらくんといひとふち
フ　シギナ　品　定
くくんのうちよはいとくくれさどまり
ぬる男れおどくあくくすどくくれやの
過　親
はくくひとくれる。ぬるくとあどくく半はぬ
オモカゲ　留　故　郷　ノマ、ニテ

いくあどくくぬ半に
玉 源氏くのはくくくどくくはのく
どくをくくくぬどくふく
くあどくくも　釈 ヨどんくくくとく
くあくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
いくくひあくくすども　釈 既かを房の
妻と宣まうくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくく
ゆどんくんづくあくて　釈 無心ハん
あくあくけあくくくくくくくくくく
あくくくのくくあくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
玉 くくくあくハどくくくくくくく
ふくくく　玉 くくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
釈 字ハ不用あくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくく
釈 このくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
いくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく
源ノ御心ヲ　強　消　分際
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

といとい（疾）きはてしてきはてしあり。（ばらう）

あものの（ものがたり）ばいとうあれて（嘆息）ついとあば

しうつ。

（源氏）

ちうきあのんをちうでうれちうのた

ふあくまどひぬるうれ。やえんくさそ（迷）（いはうやう）

なうれとのたまつう。（空セミ）なもさたぐよまどるまれ

ざわうまとば。（イイクワ）

（ヲセミ）

うぶ（ヲ）ぬふせ（生）ふよやる名のうはよ

あうふもの（ものがたり）ぶきゆうちうきあとやえ

（消）

ふ。ふ（源）いといかう（行）さよ。（源）ふのうくも

ぬ（で）まどひあうく（式）（ヲチコチ）ぬあやとんうたん。（フシギナ）

ようへうさてさもあるうぬ名の

うさよといかるえ所のめうかうう

ぎのやうふてかくあげ侍ま侍

ましあるうからばさもあいとを

ばそひつるさをこうそうでいろう

玉 上のいろ所の妻とをすれ感き

名のうきおきくのかれかくのご

とうきくトロハあるふもけうまだ

ぶいまるとのうへさて男もきゆち

も年本の孫れ祖之

（釈）このかれ

ふいとくかうさふ

侍そもふをかつをへうをあう

ちうふてそなまあさをつをく

うびるふ

（釈）これハ源氏まのをひまま

じくぶられとあれ年侍さをを侍ふ

ぬあるといふハ上ふをひつげてうめうり

とあうふの小侍猶送おうふあうて

おくに氏さををあうるへうるハほんまの

のハをひくとあをおうりてとうる

さこあるべ

侍のんくハ（湖）ハ侍のんおれいぶる

あうるうる侍ふるこれハ例のとく

すさまくく。（玉）ふ奥うよあうぶ

（釈）侍森くうあうぶをうくく（湖）師きゆるうを

（例）

とつびまふ。まいのんくハいぎうあれよ。（御供）（睦）（多）

（ツラガリ）

ひとくてうすぐうに侍さ侍ふく おが

（源氏）（メツタニ）（フヨウランク）

ぬ侍まうらるまどのんくまのなのほ

（並々ト）（似）（空ア）

きぶくちのぶまうそうも祈さく。

（消）（サンネンニテ）

かくふつけくてふもとままのとうつハ

（妨）（此有）（ハンブンハ）

おぶくあぶくうぶめぶ侍くくけくまままで。

（サニアメリ）（シングライニ）

さぶ侍とおぶをど。ハもえおぶくとり

（マヽヨ）（ヨ）（ヲ侍）（ヲ侍）（キル）

まぶくくめくまくくん所よぶふあてあて

（ヲ侍）（ヲ侍）（デモマダモ率）

いけとのふくどいとむつうぶふさ

（ユケヨ）（ムサクダウシロウ）

こうそうまくくあるくくあれバ。

（鶯）

こうぶあとうとうとうとあこ

（ナゲニ）（マヽヨ）（ヲ侍）（モウタイ）（ヲ侍）（孟子）

本とおぼえうあどつまこのもとをもとめ
やきえぬとし　釈　さらのぐるハぬけ
やうさとく手本の相をもとよりて
さとこ或ハ清るこうかの跡まのぐり
とりてくるもあくんとやくふ保法く
うくふつけてそそんもとまれ

湖師　ちつげのもとぐくしさぐどハ
このまくくぬ由年上て家ぐまる
ねくやくくつれあるとかふ保のんも
とまるぐどとく　釈　うつく祥さるかまよ
且ハかをあり

うこぐかとゆも　玉　ホのさまむさ
むさとてくんたるおまつぐひあそ
ゆ月ハさうるぬくなきくんハおまう恐をきこのーナせるふて所のさ保れ保氏ろくせまあくあう

ようあくぐくおずてとこののひくくま　釈　ようぐくバせめて世ぐよ我をすてやくのめひくくは例よれくめめてうちう
これよふもいへぐくとい男色をちのあくくま　釈　ようぐくバせめて世ぐよ我をすてやくのめひくくは例よれくめめてうちう
おかさるとぐ　玉　神保ふくぐくとは世武アとぐおくさ
ほくくぬさぐくとさくくふおくめるる河ぞくやくくく侍くく侍下ちと芸お保よなくくる河く
詞　ことぐの保小侍のごとくさて世ぞの跡とホ保ホの姓とハつぐくくるすあるを暫くきかて別ぞとすくくれさるあう
さてふちるまてとをくれるさ公う和ぐくくれど大ちくハられハ世てくられハ中川の保あどやくよあどやふけゆくく
うまうくんがつくうくさくはあどゆあくくまさくふくさんくあるもあるべくさて又この中川ぞとの神ハ方連のゆくうあさあう
ふと世ゆくくるるあるを女のつまてのれまるびあひくこくくびまの中のついでをまちくくくくてあくくつひよはきのびて
ヨくくうのつくさ女つぎくくおをひのさくぐくあうゆくくくうをいとよくおおされくるゆまよゆのづくく法則あり保
くくとぐゆてあぢくくぐ

ぐにかすてそとの跡ひくぱくくちくに　傍
デモ　莫　乗
ぬをすつてゆ若ぬくなくくれはあくさ保　渕ノ
をうまてくくめでくくとおあひきされバ。
つまてあきくん空セミよわてぞかくくあくまて
おぐさくる。と我。傳キシ